赤浜散布地ほか 白 江 遺 跡 ほか

県営圃場整備事業に 伴 う 確 認 調 査

1992年 3 月

岡山県教育委員会

あかはま 赤浜散布地ほか

〈ぼき (**窪木散布地**) 本報告書には、圃場整備事業実施計画に伴う赤浜散布地ほか (総社市)、白江 遺跡ほか (矢掛町) の 2 つの確認調査を収めました。

これらの確認調査は、いずれも圃場整備事業の実施に先立って、埋蔵文化財の 資料を得て、遺跡の保護・保存と圃場整備事業との調整を図るため実施したもの です。赤浜地区ほかの調査は平成元年度からの継続事業の3年次にあたり、白江 遺跡ほかは単年度事業として、平成3年度の国庫補助を受けて実施しました。

調査の結果、双方とも大規模な遺跡が発見され、遺構・遺物について貴重な資料を得ることができました。とりわけ、矢掛町の調査では小田郡衙と推定される遺構の一部を確認し、この地域のみならず「吉備」の古代史をみる上で非常に重要な発見となりました。そして、これらの成果にもとづき、現在関係機関等と保存協議を進めているところであります。

本報告書が、文化財の保護・保存のために活用され、また、地域の歴史を研究 する資料として広く役立てていただければ幸いと存じます。

最後に、調査および報告書の作成にあたって、岡山県文化財保護審議会委員をはじめ、関係市町村の教育委員会ならびに土地所有者等関係者から賜りました多 大な御指導と御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

岡山県教育委員会 教育長 **竹内康夫**

例 言

- 1. 本書は、岡山県教育委員会が、総社市赤浜ほかにおける県営土地改良総合整備事業に伴い 平成3年度国庫補助を受けて実施した「赤浜散布地ほか(窪木散布地)」の発掘調査報告書 である。
- 2. 遺跡は、総社市窪木に所在する。
- 3. 発掘調査にあたっては、専門委員の鎌木義昌(岡山理科大学理学部教授、岡山県文化財保 護審議会委員)・近藤義郎(岡山大学文学部名誉教授、岡山県文化財保護審議会委員)・水 内昌康(岡山県文化財保護審議会委員)の各氏から指導・助言を受けた。
- 4. 発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センター職員桑田俊明が担当し、平成3年4月10日から平成3年5月30日まで実施した。
- 5. 本書の執筆・編集は、桑田が岡山県古代吉備文化財センター(岡山市西花尻1325-3)において行った。
- 6. 本書に使用したレベルの数値は海抜高である。方位は、第1・2図が真北、他は磁北である。
- 7. 本書第2図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図(総社東部)を30,000分の1に縮尺複製したものである。
- 8. 報告書に関係した遺物、実測図、写真・マイクロフィルム等は岡山県古代吉備文化財センターにおいて保管している。

目 次

例言			
目 次	地理的・歴史的環境		,
第1章	地理的・歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		
第2章 第3章	- 両生り		
乗る早 第4章			
先4 早	\$ C &)	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	20
		1 次	
第1図	遺跡位置図(1/2,000,000)1	第12図	T21~23断面・平面図(1/80)15
第2図	周辺遺跡分布図(1/30,000)2	第13図	T21~23出土遺物(1/4)16
第3図	遺跡周辺地形図および確認調	第14図	T24~27断面・平面図(1/80)17
	査対象範囲(1/10,000)6	第15図	T 24・25・27出土遺物(1/4)18
第4図	トレンチ位置図(1/5,000)7	第16図	T 28~31断面・平面図 (1/80) ······20
第5図	T1~5断面・平面図(1/80)8	第17図	T 32~36断面・平面図 (1/80)21
第6図	T 1 ~ 5 出土遺物 (1/4) ······ 9	第18図	T 29 · 31 ~ 33 · 35 · 36 · 39 · 41
第7図	T6~9断面・平面図(1/80)10		出土遺物(1/4)22
第8図	T6・7・9出土遺物(1/4)11	第19図	T 37~42土層断面図 (1/80) ······23
第9図	T 10~14断面・平面図 (1/80) ······12	第20図	T 43~46土層断面図 (1/80) ······24
第10図	T10~13出土遺物(1/4)13	第21図	遺跡範囲想定図(1/10,000)26
第11図	T15~20土層断面図(1/80)······14		
	図 版	目次	•
図版 1 (上)調査地遠景		図版 4	T 35~38・40・41・46ほか
図版 1 (下) T 5~8	図版 5	出土遺物I
図版 2	T 9 · 10 · 13 · 16 · 19 · 21 ~ 23	図版 6	出土遺物Ⅱ
図版 3	$T 24 \cdot 25 \cdot 27 \sim 31 \cdot 34$		
	表	1 次	
- 1 -1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1		- V	
表 1 1 1	レンチ調本概更一覧主		······································

第1章 地理的 · 歷史的環境

今回調査した一帯は、高梁川旧河道の堆積作用によって造り出された広大な総社平野の南東部に位置する。高梁川分流のひとつ前川が東方の足守川と合流する付近にあたり、幾つかの微高地が点在する。そのすぐ南には標高50~60mの三須丘陵が広がり、北は吉備高原南縁の山塊がひかえている。

周知のようにこの地域は、県下屈指の遺跡密集地帯である。南接する三須丘陵にはおよそ350基の古墳が確認されており、そのうちには全長140mの小造山古墳や、縁山古墳群、亀山古墳などの巨石墳もみられる。また丘陵周囲には造山古墳、作山古墳をはじめ、備中こうもり塚や江崎古墳などがある。こうした他地域を圧倒する古墳の様相は、周辺の平野部での幾つかの大規模集落の存在を十分想定させるものである。

今回の調査地に隣接する窪木薬師遺跡は、古墳時代後期を中心とする集落跡であるが、製鉄関係の遺構・遺物が多数発見され、その工人集団のあり方が注目された。また、北西の県立大学建設予定地では、弥生時代を中心に縄文時代後期から中世にわたる複合遺跡が調査されている(窪木遺跡・南溝手遺跡)。さらにその北方の山塊には古代山城の鬼ノ城が所在し、東山麓では土塁、砦遺構の残る千引遺跡群、6世紀後半の製鉄遺跡である千引かなくろ谷製鉄遺跡が調査された。その他、古代の遺跡として調査地の北側には柘寺廃寺が位置し、備中国府推定地、国分二寺も近い。

このように、調査地一帯は、古代を中心に歴史上重要かつ有力な集団が存続した地域であるが、近年の大規模な調査によりその実態が次第に明らかとなってきた。

註

- 1) 『緑山古墳群』緑山古墳群調香団 1987年
- 2)「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査 報告35』岡山県教育委員会 1979年
- 3) 近藤義郎「江崎古墳」『総社市史』考古資料編 1987 年
- 4) 『岡山県埋蔵文化財報告』岡山県教育委員会 1991年
- 5) 前掲書4)
- 6) 『鬼ノ城』鬼ノ城学術調査委員会 1980年
- 7)『総社市埋藏文化財発掘調査年報』総社市教育委員会 1991年
- 8) 前掲書7)
- 9)「栢寺廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告34』岡 山県教育委員会 1979年



第1図 遺跡位置図 (黒丸印) (1/2,000,000)



2. 窪木薬師寺遺跡

3. 赤浜城山城跡

4. 庚申山古墳群(絵社市)

5. 庚申山遺跡

6. 庚申山東遺跡

7. 庚申山遺跡古墳群

8. 雲上山1~40号墳

9. 小造山古墳

10. 夫婦塚(のみや)古墳

11. 銭瓶塚古墳

12. 新池大塚古墳

13. 下林古墳群

15. 亀山古墳

16. 松井古墳群

17. ドンドン山古墳群

18. 稲荷山古墳群

19・緑山古墳群

20. 賀夜廃寺(栢寺廃寺)

21. 深町遺跡

22・窪木遺跡・南溝手遺跡

23. 本台山遺跡

24. 本台山古墳群

25. 長良山遺跡

26. 長良山古墳群

29. 散布地

30. 上土田古墳群

31. 大崎古墳群

32. 浦尾古墳群

33. 大崎西古墳群

34. 散布地

35. 散布地

36. 散布地

37. 散布地

38. 生石神社裏山古墳群

39. 向井古墳群

41. 高塚漬跡

42. 三手遺跡

43. 津寺遺跡

44. 甫崎天神遺影

45. 甫崎古墳群

46. 津寺 C 遺跡

47. 里住山古墙影

48. 向場古墳群

49. 造山古墳

50. 柳山古墳

51. 車塚古墳

A~F 散布地

第2図 周辺遺跡分布図 (1/30,000)

第2章 調査の経緯

総社市赤浜、下林、窪木一帯においては県営土地改良総合整備事業が計画されているが、当 地については、総社市教育委員会から昭和63年9月30日付けで、文化財保護法第57条の6第1 項の規定による遺跡発見届が上げられ、それに伴い遺跡の範囲確定および遺跡保存の協議資料 を得るため、工事着工前に国庫補助を受けて数年次にわたる確認調査を実施することとなった。

発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センターが、専門委員の指導・助言を得て平成元年度か ら実施している。平成元年度調査は、平成元年11月6日から平成2年1月23日まで実施され、 赤浜地区の東側3分の1と下林地区の東側半分の地域について遺跡の範囲等が明らかになった。 引き続いて平成2年度の調査は、赤浜地区の西側3分の2の地域について平成2年4月9日か ら平成2年5月23日まで行われ、広範囲な遺跡の所在が確認された。

本年度の発掘調査は、下林地区の西方、窪木地区を対象に平成3年4月10日から平成3年5 月30日まで実施した。

調査にあたっては、総社市、総社市教育委員会、地権者等関係者から多大なご協力を得た。 また、発掘作業にあたっては、地元有志の方々にご協力を得た。特に、芳谷恒夫氏には調査中 多方面でお世話になった。諸氏、諸機関に対し深く謝意を表する次第である。

調査体制

岡山県古代吉備文化財センター

所 長

次 長

横山 常實

河本 清

調査第一課長

葛原 克人

総務課長

藤本 信康

文化財保護主任

桑田 俊明 (調査担当)

発掘作業員

伊丹 朗・杉井信平・坪井忠彦・山田 始・渡辺保夫・新谷和男・守谷幹夫 角田文義・黒江多佳子・黒江登代子・佐藤花江・友野サヨ子・中島増美

日誌抄

4月10日(水) 器材搬入 T3掘り下げ終了. 写真撮影 T 2 掘り下げ涂中

11日休) T 1 · 2 · 6 掘り下げ終了.写 真撮影 T15・14掘り下げ途中

- 12日金)T13~16掘り下げ終了,写真撮影 T12・17・18掘り下げ涂中
- 15日(月) 安全確認 実測
- 16日(火) T17~20掘り下げ終了, 写真撮影 T16掘り下げ終了 T4掘り下げ 途中
- 17日(水) T 4 掘り下げ終了, 写真撮影 T 7・8・28掘り下げ涂中
- 18日休) トレンチの除水対策
- 19日金) T 7・8・28掘り下げ終了,写真 撮影 T 12~14断面実測 T 27・29 掘り下げ途中
- 20日仕) T30・31掘り下げ終了,写真撮影 T7・8・27~29遺構検出,写真 撮影 T22・23・32掘り下げ途中
- 22日(月) T 22・23・32掘り下げ終了,写真 撮影 T 15~18断面実測 T 33・34 掘り下げ途中
- 23日(火) T33・34遺構検出,写真撮影 T18~ 20断面実測 T12・13・20埋め戻し
- 25日(木) T35写真撮影 T35~38掘り下げ T49掘げ下げ途中
- 26日金) T48~49掘り下げ終了,写真撮影 T33~34清掃,写真撮影
- 30日(火) T21断面実測 T35~38・21埋め 戻じ
- 5月1日(水) T1~3断面実測 T1~3·19 埋め戻し
 - 2日(木) T1~3断面・平面実測 T11掘り下げ T23埋め戻し
 - 7 日(火) T 9~11掘り下げ終了,写真撮影 T35~38実測準備

- 9日(木) T42・44掘り下げ終了,写真撮影, 断面実測 T44・50断面実測 T 43・50埋め戻し
 - 10日金) T 45・47~49断面実測 T 42・ 44・45埋め戻し
 - 13日(月) T36~38断面実測 T36・47~49 埋め戻し
 - 14日(火) T32~34断面・平面実測 T32・ 37・38埋め戻し
 - 15日(水) 安全確認
 - 16日休) T 32・34埋め戻し T 4・6・ 11・14・22・33清掃 専門委員の 現地根察
 - 17日金)T 4・7・28・33平面・断面実測 T 4・7・14・28・33埋め戻し
 - 18日仕) T 30・31断面実測 T 30・33埋め 戻し
 - . 20日(月) T 9・11・29・35平面・断面実測 T 8・22断面実測 T 6・10平面実 測T 8・9・27・30埋め戻し
- 21日火)T6・10・11断面実測 T6・ 10・11・22埋め戻し
 - 22日(水) T39・41掘り下げ T41平面・断 面実測 T39断面実測
 - 23日休)T51・52掘り下げ終了,写真撮影, 断面実測
 - 24日金) T51・52埋め戻し
 - 27日(月) T39・41埋め戻し
 - 28日(火) T35埋め戻しトレンチ安全点検・ 位置確認確認仮設レベル杭撤収
 - 29日(水) T29埋め戻し器材の整備・かたづけ 30日(木) 器材の撤収

第3章 発掘調査の概要

今回の発掘調査は、赤浜散布地の西方、前川と国道180号線に挟まれた窪木散布地一帯を対象範囲に実施した。調査地は、中央が東西に長く延びる微高地をなし、西を除く三方が一段低い地形となっている。その全域について西より東にむかって調査を進め、2×5mのトレンチを計46本掘開した。各トレンチの調査結果は以下のとおりである。

①T1~6 (第5·6図)

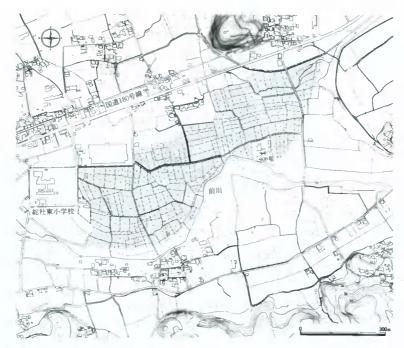
T1~4は前川の氾濫原にあたり、特にT3・4は現在でも洪水時には冠水が著しい。

T1・2は表土下40cmで淡灰褐色から茶褐色の砂質土層が厚く堆積し、6世紀代の須恵器杯蓋(2)や土飾器の甕(1)他が出土した。上層からは弥生土器、中世土器(早島式土器ほか)があるが、いずれも小片かつ少量である。**T3**は湧水が著しく掘下げを中止したが、弥生土器(3・4)や須恵器の宝珠形つまみ付き杯蓋(5)が流入していた。**T4**では、浅い層から土壙2、溝1を検出したが出土土器より近代以降のものである。地元の古老によると、明治・大正期にはT4付近には小集落があったといわれ、北西には荒神社が今も田地中に残っている。5層からは、後期の弥生土器(6~8)や須恵器(9・10)が出土し、その上層では備前焼・瓦質土器・近世陶器が出土した。

T5は微高地上に位置し、床土下の3層上面で方形竪穴住居跡が2軒検出された。東側のH-1は辺4m以上で西辺にカマドらしい焼土塊・炭を多く含む部分がみられる。6世紀代の須恵器・杯蓋(12)や土師器・飯の把手(11)などが出土している。H-2からもほぼ同時期の土器が出ている。また、わずかながら弥生土器片もみられる。

② T 6~9 (第7·8図)

これらのトレンチは微高地のほぼ中央南緑に位置し遺構・遺物も多い。**T6**では竪穴住居跡が検出された。当初住居跡の真中をあてたため、東にトレンチを拡張して壁面を確認した。プランは不明確ながら、緩やかな弧状を描く。またトレンチ西半では床面上に焼土塊と炭の層が4~7㎝の厚さで水平堆積していた。住居跡内の出土遺物には、須恵器の甕(17)・杯身(22・23)・杯蓋(21)や土師器の甕(20)・甑(18・19)があり、いずれも6世紀代のものである。そのほかでは、後期の弥生土器も若干出土した。**T7**では遺構は小ピット1が確認された程度であったが、包含層(3層)中から各種の土器が出土している。弥生土器では24・27・28は中期後半、25・26・29~38は後期の土器である。須恵器では6世紀後半の杯身(41~43)、扁平な宝珠形つまみ付き杯蓋(39)などがある。また、須恵器片を転用した上下に半円



第3図 遺跡周辺地形図および確認調査対象範囲 (アミ目部分) (1/10.000)

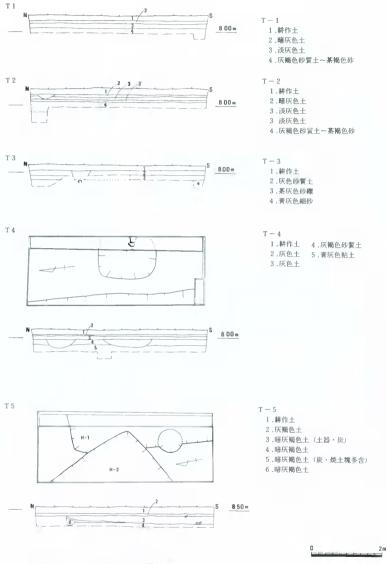
形の切れ込みをもつ土鍾(44)もある。そのほかでは、弥生・古墳時代の製塩土器片も出土した。 **T 8** ではピット9を確認し、長顕壺や器台形土器などの後期弥生土器と6世紀代の須恵器、土師器が若干出土した。 **T 9** は表土下50cmで円礫層となり、後世にかなり改変をうけていた。ただし、出土遺物では中期・菰池式併行期の弥生土器(45~48)が出土している。46~48はともに内面を刷毛目調整し、46の胴部中位には貝殻腹縁による施文がみられる。

③ T10~14 (第9·10図)

T10は、T9の東方約30mに設置した。地権者によるとかつてこの南側の小溜池中から土器が出土といわれ、開掘の結果、方形の竪穴住居跡1、溝1、ピット6を確認した。住居跡はトレンチ南西隅に一部かかり規模は不明だが、床面までの深さ約30cmと遺存良好で壁体溝をもつ。須恵器の杯破片が出土している。溝は幅110~160cmで南北にのびるが、深さは10cm程度と浅い。



第4図 トフンチ行順図 (1/5,000)



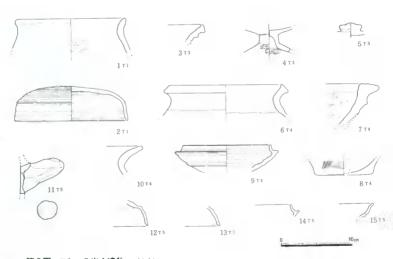
第5図 T1~5断面·平面図 1/80)

上面から後期弥生土器(49~51)や菰池式土器併行の52が出土している。50は胴部内面をヘラ削りの後へラ磨きする。52は内面へラ磨きである。

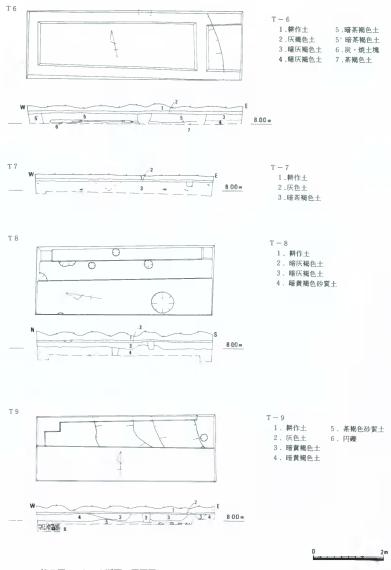
T11~14は微高地と前川に挟まれた低位部にあり、微高地南縁とは40~50cmの高差がある。 土層は基本的に同じで、2層が近世以降の水田層、3層が中世水田層である。最下層(5層) はグライ化の著しい青灰色粘質土で、早島式土器が出土している。いずれも水田層以外の遺構 は確認されなかった。出土遺物には、土師器・杯(53)、須恵器(56)、早島式土器(54・57・ 58)、青磁陶器、備前焼、亀山焼などのほか、各種の中世土器や鉄滓がある。いずれも流れ込みである。

④ T 15~20 (第11図)

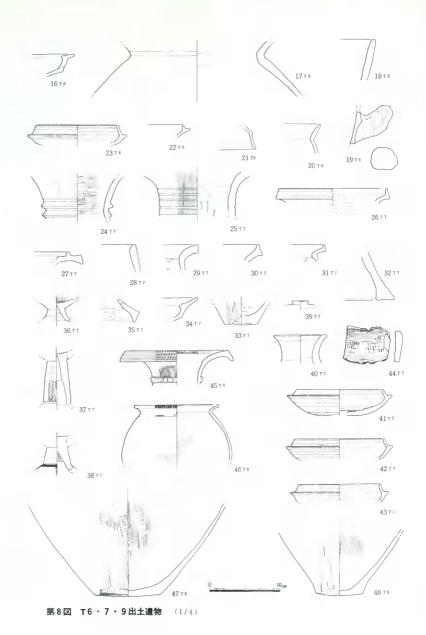
前述の $T11\sim14$ よりさらに南方河川寄りに設けたトレンチである。土層はそれらと同様であり、遺構も明瞭なものは検出されなかった。ただ、T17でトレンチに直交する東西方向の浅い溝を 2 条確認したが、時期的には新しいものと思われる。出土遺物にも特筆すべきものはないが、 $T11\sim14$ と同種類の遺物に加えて弥生土器($T17\sim19$)、砥石片(T18)、製塩土器(T19)が出土している。なお、T18でみるかぎり、最下層の青灰色粘質土はかなり厚く堆積している。



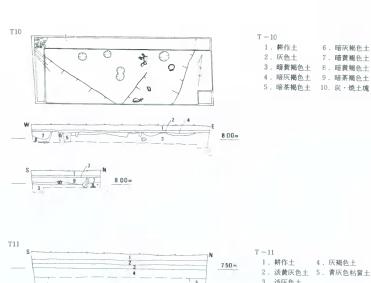
第6図 T1~5出土遺物 (1/4)

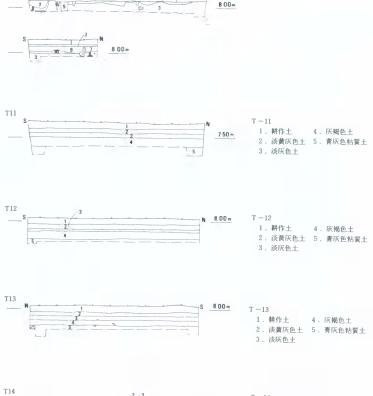


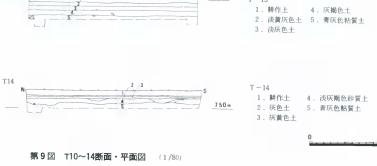
第7図 T6~9断面·平面図 (1/80)



- 11 -

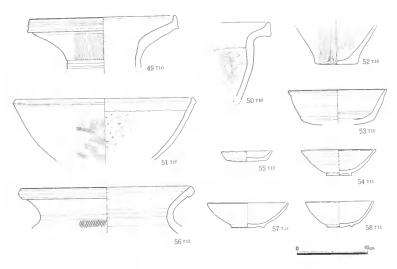




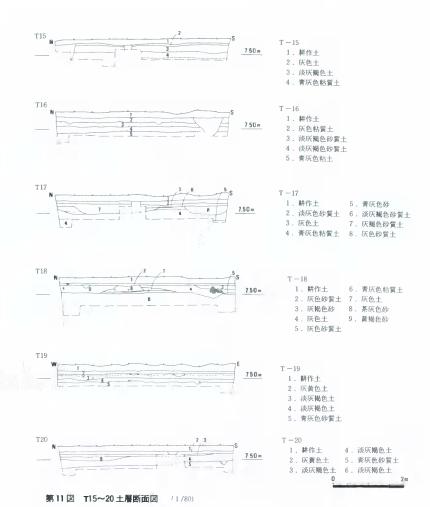


⑤ T 21~23 (第12·13図)

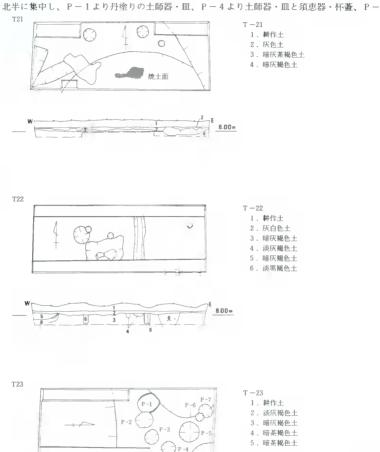
再び、微高地へもどってT21・22は、前川に最も近接する南東緑辺のトレンチである。現地表下20~30cmから遺構が検出でき、T21では、竪穴住居跡1、溝2、土壙1、ピット3を確認した。住居跡は、円形を呈し直径5~6mの規模と推定される。弥生時代後期の土器を出土し、炭・焼土塊を含む。遺存は良好である。トレンチ東側の溝は住居跡を切ってつくられ、幅約90cm、深さ15cmである。西隅の溝は、幅約40cmで西側は方形の土壙により切られている。溝は、流入土からみてどちらもほぼ同時期のものと思われる。土壙はコーナー部分しかつかめず、方形の竪穴住居跡の可能性もある。出土遺物には、後期の弥生土器(59・60)、須恵器をはじめ、中期後半の弥生土器、土師器、製塩土器、備前焼、亀山焼、中世土器、鉄片がある。T22は、ブランでの遺構検出が難しくほとんどが断面により確認したが、土壙2、ピット9、溝1を検出した。溝は幅30cmで南北にのびるが、ごく浅い。土壙は南東隅と北西隅の断面にそれぞれ観察され、前者は長さ65cm、深さ24cm、後者は長さ70cm以上、深さ35cm以上である。双方とも流入土中位に焼土塊の混入がみられる。ピットは弥生時代のものと6世紀代のものとがある。トレンチ内からは須恵器の杯(63)や後期弥生土器(61・62)のほか中世土器、備前焼、亀山焼が若干出土した。



第10図 T10~13出土遺物 (1/4)



一方、**T23**は微高地の北辺に位置し、奈良時代を中心とした遺構(土壙2、ビット7、溝1)を検出した。西側の土壙からは上面より丹塗りの土師器・皿(67)が出土した。ビットは

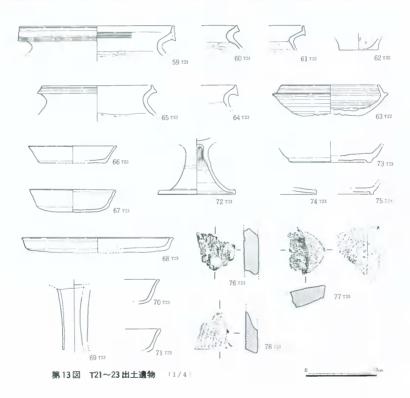


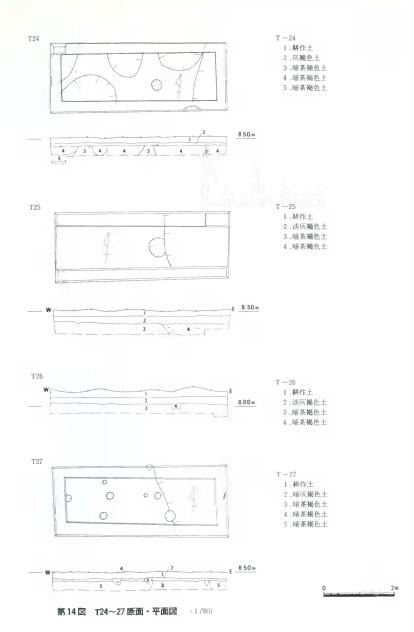
2

第12図 T21~23断面・平面図 (1/80)

8 00 m

5で土師器・皿と早島式土器細片、P-7で土師器・皿と須恵器・杯がそれぞれ出土している。 土師器・皿は8世紀代のもので、須恵器は6世紀代である。P-1は楕円形に近く、三方が著 しく焼成を受けていた。溝はほぼ東西に延び、幅165cm、深さ25cmを測る。ただ、南側上端は 不明瞭であった。溝底付近には焼土塊の混在する炭層と須恵器・土師器片、円礫がみられた。 時期は6世紀後半である。遺物で注意を引くのは、平瓦片(76~78)と土師器の高杯形土器 (69)である。前者は小片ながら布目をよくとどめ、2層~3層上面から3点出土した。後者 は断面七角形の脚部で、精選した胎土を用い外面をへラで面取りしている。2層出土で、8世 紀代の土器である。その他では68は内外面を丹塗りし内面に沈線を1条施している。





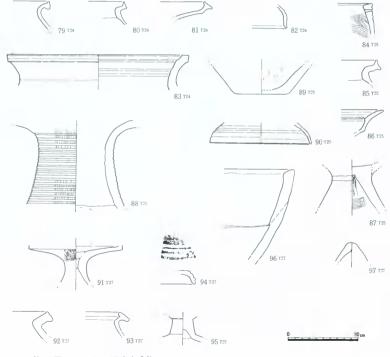
- 17 -

⑥ T 24~27 (第14·15図)

これらのトレンチは微高地の中央にあたり、遺構密度も最も高い。

T24では土壙 4 ないし 5、ビット 3 を確認した。遺構はすべて包含層上面で検出したが、遺構埋土との識別が非常に難しかった。検出面は現地表下20cmとごく浅い。土壙は直径 1~1.5 mの不整円形をなし、深さは50cm前後である。切り合い関係をもつものはみられず、密集した状態である。出土遺物は、検出面のほぼ全面に分布し、主には後期弥生土器(79~81)と 6 世紀代の須恵器(82)・土師器である。北西隅の土壙中からは長頸壺形土器ほかが少し出土している。83は須恵器の甕形土器である。

T25では、東半に落ち込みがみられた。壁面がやや緩傾斜であるが、円形の竪穴住居跡と思われ、トレンチ東辺で後期の弥生土器が多数確認された。かなり多量の土器群のため調査上の制約から取り上げは行わなかったが、後期の壺形土器・甕形土器・器台形土器・高杯形土器と



第15図 T24・25・27 出土遺物 (1/4)

菰池式土器併行の甕形土器も出ている。遺物は2・3層にわたって小片ながら各種の土器が出土した。84は弥生中期・菰池式併行の鉢形土器である。85~89は後期の土器である。須恵器では90の杯蓋をはじめ杯身・甕形土器・高杯形土器などがあり、多くは6世紀後半のものである。その他、製塩土器、早島式土器、備前焼、中世土器などが出土している。

T26では断面に小ピット1がみられるものも、他に遺構は確認できなかった。遺物もほとんど出土せず、周辺のトレンチと対照的である。

T27は微高地の中央にあたり、耕作土直下から竪穴住居跡 1、土壙 3、ピット 9 を確認した。住居跡は方形らしく南北断面に壁体をとどめる。上面から後期の弥生土器小片が出ている。土壙はトレンチ東壁にかかってそれぞれ検出され、中央のピット状のものからは獣骨が出土した。出土遺物は、T25と同様で各種の土器がみられる。97は高杯形土器の短脚部である。

⑦ T 28~31 (第16·18図)

これらは微高地の東寄りに設けたトレンチである。

T28では、トレンチ西端に溝あるいは住居跡らしい落ち込みを確認した。流入土中には土器、焼土塊、炭を含む。また、断面観察により小土壙1、ピット2が確認できたが、西方のトレンチに比し遺構・遺物ともやや減少する。

T29は、トレンチ西側が淡灰褐色軟質土 (3層) により削平されていたが、土壙 2、ピット 4 を確認した。土壙は円形土壙で、南西隅のものからは土師器が出土した。98は表面の摩滅が 著しいが内面をヘラ削りする。99は甑片で把手も伴出している。

T30はT29同様に3層により包含層上面がかなり攪乱を受け起伏が大きい。小ピット1以外 は遺構はみられない。弥生土器・須恵器ほかが若干出土している。

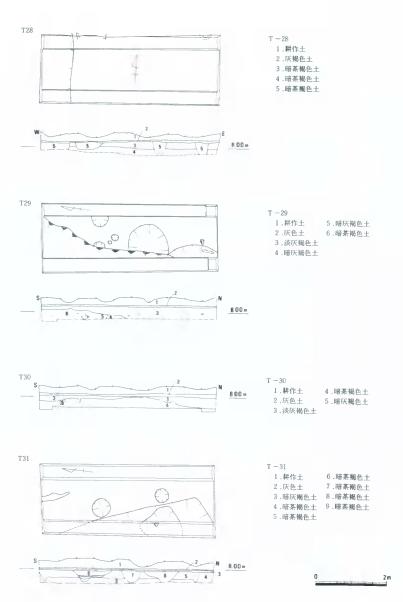
T31では、方形竪穴住居跡 1、ピット 3、土壙 2 を確認した。住居跡は南西のコーナー部分にあたり、断面に壁体溝をよくとどめる。この住居跡の埋没後に土壙が 2 基掘り込まれ、そのひとつからは 6 世紀後半の須恵器・杯身(101)が出土している。出土遺物は須恵器、土師器がごくわずかあり、弥生土器はみられない。

⑧ T 32~36 (第17·18図)

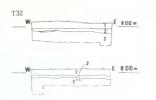
これらのトレンチは、微高地の東端とその周辺部に設置した。

T32は、小麦作付け中のため対象地の東端に設置し、2箇所にわけてトレンチをいれた。包含層はみられたが遺構は確認されなかった。なお、地権者によると、このトレンチの北東約60m、微高地東端からかつて土器が多数出土したとのことである。

T33~35は、微高地の北側低地にあたり、1 m以上掘り下げたが中・近世水田層以外に遺構は確認されなかった。土層の状況は、南側のT11~20と共通する。須恵器の短頭壺形土器 (104)、備前焼の摺鉢形土器 (103) がある。



第16図 T28~31 断面·平面図 (1/80)







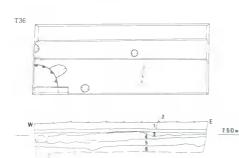
















0 2m

第17図 T32~36断面・平面図 (1/80)

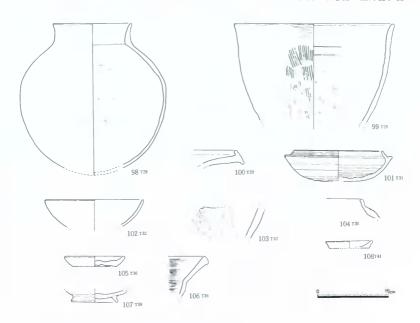
T36では、現表土下50cmで包含層(5・6層)が確認された。この付近は、東方の窪木薬師 遺跡の微高地と西方の今回調査の微高地が接する部分にあたるが、両微高地は遮断せず連続す ることが明らかとなった。遺構は土壙1、ピット4があるがいずれも中世以降である。出土土 器は少なく、特に弥生土器・須恵器はそれぞれ2、3点である。

⑨ T 37~43 (第18·19図)

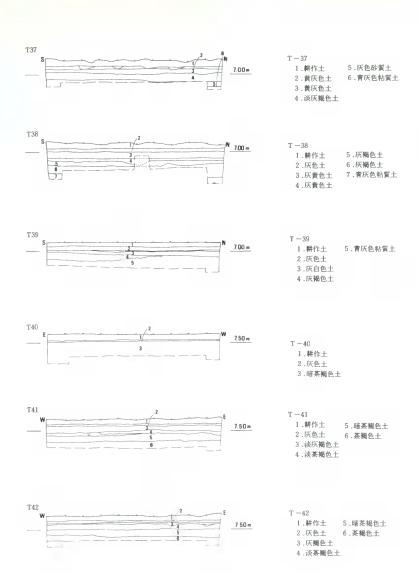
窪木薬師遺跡の北に隣接し、当初、遺構の存在が予想された。しかし、微高地は北へ続くも のの、明瞭な遺構は確認されなかった。

T38では6・7層が基盤層の可能性があり、南方の微高地はこの部分まで緩やかに下降しながら延びてくるようである。ただし、西側の**T37・39**では土層が異なり、低位部の堆積状況を示している。おそらくT38あたりを先端部にして舌状に微高地が形成されたものであろう。これらのトレンチでは遺構はみられず、遺物もまばらである。

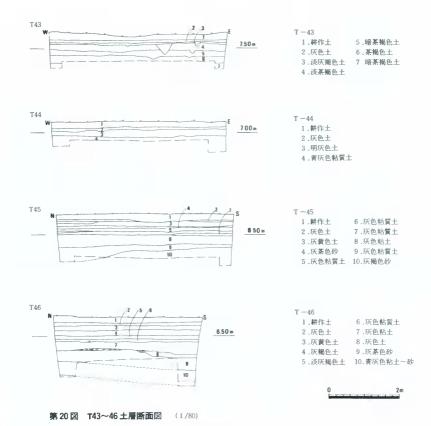
T40~43では、暗茶褐色の包含層がほぼフラットに続き、かなり厚く堆積する。しかし、中世の小溝や小ピット以外は遺構は検出できなかった。遺物は、6世紀代の須恵器・土師器、白



第18図 T29・31~33・35・36・39・41 出土遺物 (1/4)



第19図 T37~42 土層断面図 (1/80)



磁壺片・青磁片、早島式土器、亀山焼、備前焼、中世土器などが出土した。なお、T41の4層から骸骨がまとまって出土している。

① T 44~46 (第18 · 20図)

T44は基盤層は確認できなかったが、上層から鉄滓2点、4層から早島式土器が出土した。 T45・46は、用水路にかかる部分のため、150~200cm掘り下げた。下層は砂層および粘土層 となり、旧河道の様相を呈していた。長良山の山裾添いに南流する旧河道がこの部分で大きく 東に折れ、すぐ東側で前川と合流するものである。遺物は中世土器他が若干ある。

表-1 トレンチ調査概要一覧表

レンチ 号	検出遺構	出土遺物	出土业	現表土レベル (m)	遺構・遺物包含 までの深さ(cm
l 7		須恵器・土師器・中世土器・備前焼	- 様少	8.45	-
2			少量	8.50	
3	_	弥生工器。須定器 - 小生工器。須定器 - 一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、	催步	8,20	_
-		***・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	少量	8,25	
4		外生工器,須思器,工廠器,開發,所以 軟生十器,短痕器,工廠器,開放機, 開發	中量	8.60	-25
6	受穴住居 2		中量	8.50	-20
	整穴住居 1	弥生土器・須恵器・土鰤器・中世土器・鉄淬・サスカイト片	多量	8.45	-20
7		弥生土器・須恵器・土師器・製塩土器・陶器・備前焼・土錘 (転用品)	少量	8.40	-20 -25
8	土壙 1・柱穴	弥生土器·須恵器·土師器·製塩土器·中世土器			-25 -25
9	沸1・柱穴	弥生土器・須恵器・土師器・陶器・サヌカイト片	中量	8.40	-25 -20
10	聖人住居1・講1・柱穴	弥生土器・須恵器	少量	8.40	-20
11	-	須恵器・土師器・平瓦・陶器・中世土器・備前焼・鉄片	少量	7.95	
12	-	須恵器・青磁・亀山焼・中世土器	少量	8.10	
13	-	須恵器・陶器・備前焼・中世土器・鉄滓	少量	8.10	
14	-	須恵器・陶器・中世土器・鉄滓	少量	8.00	_
15	-	-	-	7.95	-
16	-	須恵器・土師器・陶器・備前焼・中世土器	少量	8,00	-
17	-	土師器・須恵器・陶器・備前焼	少量	8.00	
18		弥生主器・須恵器・亀山焼・陶器・備前焼・中世土器・砥石	少量	8.00	100
19	-	弥生土器・須恵器・製塩土器・偏前焼・中世土器・サヌカイト片	少量	7.90	-
20	-		-	7.90	
21	竪穴住居1・土壌 1・溝2・柱穴	弥生主器・須恵器・製塩土器・上師器・亀山焼・陶器・中世土器・備前焼・鉄片	中量	8.30	-25
22		弥生土器·須恵器·土師器·備前焼	少量	8.30	-25
23	土壌1・溝1・柱穴			8.55	-35
24	土壌4・溝1・柱穴		多量多量	8.55	-25
25	土壙1・柱穴		多量	8.55	-40
26	柱穴	MILES MESS SCRIEN THAN STIME MINNEY LETTER LAND	-	8.45	-40
27	溝(竪穴住居?)	生土器・須恵器・土飯器・亀山焼・中世土器	8-III	8.50	-25
21	傳 (並ん) 店ごり 1・土壌3・柱穴	五工學, 河京縣, 工庫學, 《 田城, 土屋工程	7 E	0.50	200
		 	中音	8.35	-20
28	土壌・溝・柱穴		中量	8.35	-30
29	土壌2・柱穴	弥生土器・須恵器・土師器・青磁・中世土器・備前娩	少量	8.30	-35
30		弥生土器・須恵器・土師器・陶器・中世土器			
31	竪穴住居1・土壌1・柱穴		少量	8.20	-25 -25
32	-	- 弥生土器・須恵器・中世土器・陶器	僅少	8.10	-25
33		須恵器・中世土器・備前焼・平瓦(布目 ・鉄滓	僅少	8.00	-
34	-	****	_	8.00	
35	_	須恵器・青磁・中世土器・陶器	僅少	7.50	-
36	柱穴	弥生主器・須恵器・土師器・白磁・亀山焼・中世土器	少量	7.85	-50
37	-	須恵器・土師器・陶器	僅少	7.40	-75
38	_	須恵器・中世土器・陶器	僅少	7.25	-65
39	-	須恵器・中世土器・陶器	僅少	7.25	-
40	-	須壱器・中世土器	僅少	7.75	-20
41	-	弥生土器・須恵器・土師器・白磁・青磁・亀山境・中世土器	中量	7.85	-45
42	-	須恵器・中世土器	僅少	7.90	-40
43	-	須恵器・土飾器・中世土器・備前機	少量	7.90	-45
44	_	須恵器・陶器・中世土器・鉄座	少量	7.30	-
45	_	須恵器・青磁・中世土器	少量	7.05	-
					T.

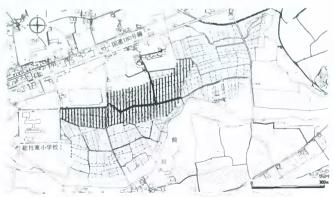
第4章 まとめ

総社市赤浜、窪木ほかでは、県営土地改良総合整備事業に伴い平成元年度から国庫補助を得て確認調査を継続してきた。今回の調査は、事業予定地の西部分-前川以北を対象に行い、2×5mのトレンチを46本設定した。

調査地内の旧地形は、現状でもよく観察でき、中央に東西に長く延びる微高地とその両側に旧河道および湿地帯が広がっている。そして、東西約600m、南北約120mの微高地のほぼ全域に遺跡が存在し、竪穴住居跡、柱穴、土壙、溝などを検出した。住居跡は円形(弥生時代後期)と方形(古墳時代後期)があり、広範囲に存在する。遺構密度は微高地の中央部が高く、出土遺物も多い。傾向としては、T-21・27あたりを境として遺物の出土量がかなり減少する。また、微高地中央北辺では8世紀代の遺構・遺物が認められ、奈良時代の遺跡の所在も明らかとなった。この微高地は、東側で窪木薬師遺跡につながるが、調査では遺構は確認されなかった。

出土遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・瓦など、弥生時代後期と古墳時代後期を 中心に長期間にわたってみられる。なお、遺跡の南北両側は旧河道・湿地帯と想定され、遺構 はみられず遺物もごく少ない。

以上のように、今回の調査により東西に長く延びる微高地上に弥生時代後期と古墳時代後期を中心とした大規模な集落跡が確認された。周辺には巨石墳も多く、また調査地の一角には 鉄・鉄器生産と関連の深い窪木薬師遺跡があり、それらとの関わりからも注目される。

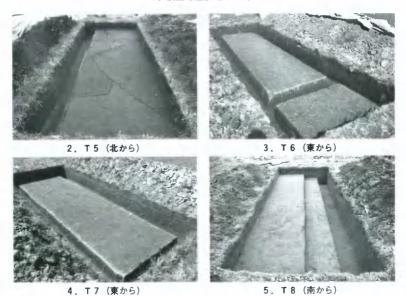


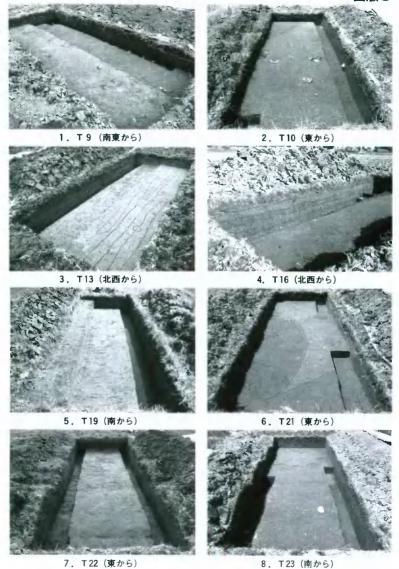
第21図 遺跡範囲想定図 (||||部分,アミ目は調査範囲) - (1/12,000)

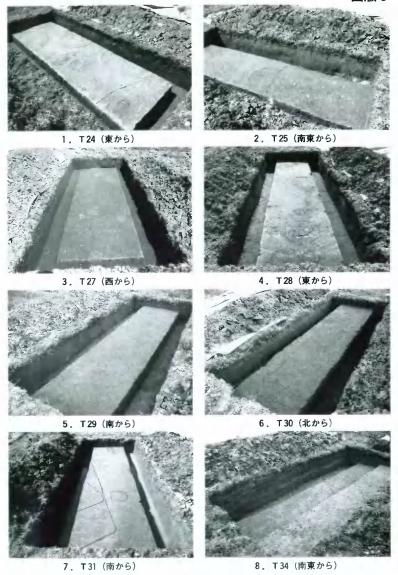
図版 1



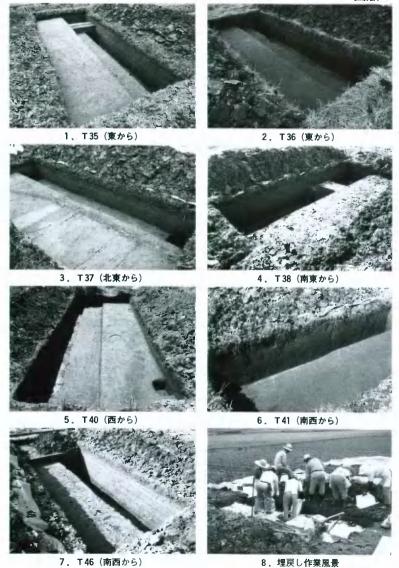
1. 調査地遠景(西から)



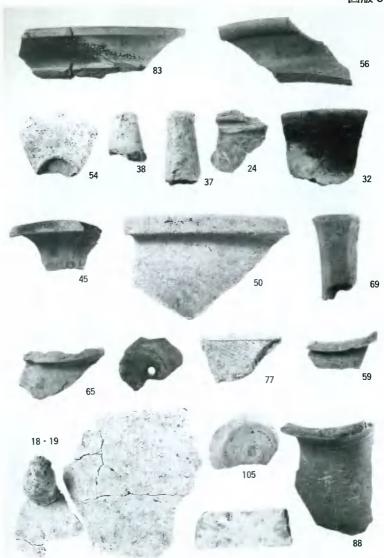




図版 4



図版 5



出土遺物 I

図版 6



ロ江遺跡ほか

例 言

- 1. 本書は、岡山県教育委員会が、矢掛町中地区における県営圃場整備事業に伴い、平成3年 度国庫補助を受けて実施した「白江遺跡ほか」の発掘調査報告書である。
- 2. 遺跡は、小田郡矢掛町中に所在する。
- 3. 発掘調査にあたっては、文化庁の河原純之主任調査官、専門委員の鎌木義昌(岡山理科大学理学部教授、岡山県文化財保護審議会委員)・近藤義郎(岡山大学文学部名誉教授、岡山県文化財保護審議会委員)の各氏から指導・助言を受けた。
- 4. 樹種鑑定については、畔柳鎮氏(岡山商科大学教授・岡山大学農学部名誉教授)から有益 な教示を得た。
- 5. 発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センター職員桑田俊明が担当し、平成3年10月21日から平成3年12月6日まで実施した。
- 6. 本書の執筆・編集は、桑田が岡山県古代吉備文化財センター(岡山市西花尻1325-3)において行った。
- 7. 本書に使用したレベルの数値は海抜高である。方位は、第1・2図が真北、他は磁北である。
- 8. 本書第2図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図(矢掛)を30,000の1に縮尺複製したものである。
- 9. 報告書に関係した遺物、実測図、写真、マイクロフィルム等は岡山県古代吉備文化財セン ターにおいて保管している。

目 次

例:	膏			•
目 :	次			
第15	章	地理的・歴史的環境		33
第25	章	調査の経緯		36
第 3 i	章	発掘調査の概要	••••••	38
第41	章	まとめ	•••••••	62
				•
		図目	次	
第1		遺跡位置図(1/2,000,000)33	第14図	東区土層断面図(T37~41)(1/80)…50
第2	図	周辺遺跡分布図(1/30,000)34	第15図	東区出土遺物 I (T37・41)(1/4) …51
第 3	図	西区出土遺物(T2~4・9)(1/4) …38	第16図	東区平面・断面図 I (T42・43)
第4	図	遺跡周辺地形図および確認調		(1/80)52
		査対象範囲(1/8,000)39	第17図	東区出土遺物Ⅱ(T42)(1/4) ·····53
第 5 [トレンチ位置図(1/5,000)40	第18図	西・東区出土遺物(T16・42・44)
第6		西区土層断面図 I (T1~6) (1/80) ···41		(1/3)54
第7[西区土層断面図Ⅱ(T7~12)(1/80) …42	第19図	東区平面・断面図Ⅱ(T44)(1/80)…54
第8			第20図	東区出土遺物Ⅲ(T44)(1/4) ······55
第9		中区土層断面図 I (T15~20) (1/80) …44	第21図	東区出土遺物 IV (T44下層) (1/4) …56
第10		中区土層断面図 Ⅱ (T21~26) (1/80) ···45	第22図	東区出土遺物 V (T44下層) (1/4) …57
第11	図	中区土層断面図Ⅲ (T27~31·33)	第23図	東区出土遺物 VI (T44中層) (1/4) …58
		(1/80) ·····47	第24図	東区出土遺物 Ⅷ (T44上層) (1/4) ···58
第12[义	中区土層断面図IV (T32・33~36)	第25図	東区平面・断面図Ⅲ(T45・46)(1/80)…59
		(1/80) ······48	第26図	東区出土遺物™(T43・45・46)(1/4) ···60
第13[凶	中区出土遺物(T17・18・20・23	第27図	遺跡範囲想定図(1/10,000)62
		~25 · 32~36) (1/80) ······49	第28図	小田川周辺の古代遺跡分布図63
		図版	目次	
図版	1 (_	上)調査地遠景	図版 6	東区(T43~46)
図版	1 (F)西区(T 1 ~ 4)		上)出土遺物 [(中区)
図版	2	西区(T5~14)		下)出土遺物Ⅱ(東区)
図版	3	中区(T15~22)	図版8	出土遺物Ⅱ(東区)
図版	4	中区(T23~30)	図版 9	出土遺物 IV (東区)
図版	5	中・東区(T31~40・42)		• • •
		表目	次	

第1章 地理的 · 歷史的環境

遺跡の所在する小田郡矢掛町は、岡山県の南西部に位置し、本陣をもつ近世宿場町として発達した。町のほぼ中央を横断する小田川は、流路の短さと支流河川の多さから県下随一の「暴れ川」といわれるが、その沖積化と支流の扇状作用により所々に適度の低地を形成している。町内では、小田、本堀、浅海、川面、矢掛、東三成、中、横谷の8~9の肥沃な扇状地が形成されている。もっとも、高梁川との合流点付近の真備町東部を除いて、これらの低地は地形に制約されて各々小規模で自己完結的な地理的構造を余儀なくされている。こうした、各々が自己完結的な安定性を保ち分断されながら、同時に小田川の河川統御においては結びつくというこの流域の地理的特性は、当地の歴史的環境に大きな影響を与えている。なお、この上流域は広島県境に及び、備後の神辺平野と直結する。本遺跡からわずか15㎞の距離である。

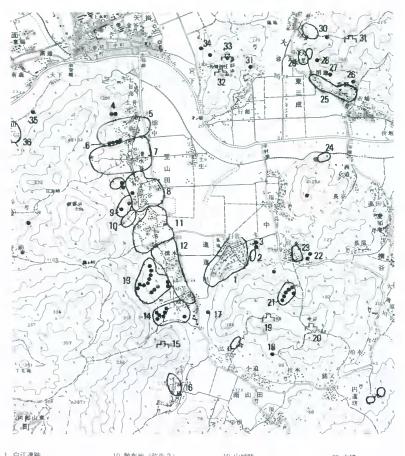
矢掛町内では、かつて遺跡の上限は弥生中期までといわれてきたが、最近の調査により縄文時代早期まで遡ることが明らかとなってきた。弥生時代前期の調査例も増え、調査地北方の東三成地区の吉野遺跡では壺棺が検出され、今回の調査でも2地点から土器片が出土している。また、東方の真備町妹地区の井原線予定地の発掘調査においても前期後半の土器が比較的まとまって出土した。おそらくこの時期の遺跡は、先の地理的特性から小田川流域の支流扇状地ごとに存在するものと推測される。中期では、比較的早い時期から遺跡が所在し、東三成、里山田、江良、毎戸などで広く分布する。後期ではさらに遺跡は増加し、各扇状地内で普遍的にみられるようになる。今回の調査地縁辺では、白江遺跡や芋岡山遺跡などが知られている。前者

は中期後半から後期にかけての集落遺跡で北斜面に広くのびる遺跡とされている。後者は、そのすぐ東側の独立丘陵頂部に造営された後期の集団暴である。双方とも県内を代表する指標遺跡として学史的な意義をもっている。なお、これらに近接して里山田や江本に幾つか散布地があり、いずれも白江遺跡と併行する時期の集落跡と推定される。

古墳時代では、約60の古墳群が確認されており、特に後期古墳約160基の中には小迫大塚古墳、橋本15号墳(荒神塚古墳)など特筆すべき古墳が含まれている。前者は終末期の方墳で一



第1図 遺跡位置図 (黒丸印) (1/2,000,000)



- " " "			~~~
1.白江遺跡	10.散布地 (弥生?)	19.山城跡	28. 古墳
2. 芋岡山遺跡	11. 散布地 (弥生)	20.山城跡	29. 大里第1 - 第2 地点遺跡
3. 芋岡山1・2号古墳	12. 散布地 🥠	21.安居寺谷古墳群(1~6号古墳	
4.土井1・2号古墳	13.橋本古墳群 (1~15号古墳)	22. 江本裕谷寺谷1 2 号古墳	31.古墳
5.散布地(弥生~中世)	14.池尻古墳群 (1~6号古墳)	23. 散布地 (弥生)	32.茶臼山城跡
6.畑中1~3号古墳ほか	15.山城跡	24. 散布地 (古墳)	33.山城跡
7.散布地(弥生~中世)	16.散布地 (弥生?)	25. 散布地 (古墳~中世)	34. 古墳
8.散布地(弥生~)	17.王子の塚古墳	26.国勝寺裏古墳	35.向山古墳
9.三頂山1・2号古墳	18. 小迫大塚	27. 散布地(古墳)	36.散布地(弥生?

第2図 周辺遺跡分布図 ·1/30,000)

辺約30mを測り、幅2.4mの大形横穴式石室を有す。後者は石棚をもつ県内2例しかない古墳である。これらが調査地の所在する中地区内および近辺に築造されていることは興味深い。

ところで、当地域は備中国小田郡に所属し、實成・拝慈・草壁・小田など八郷から成っている。先述の8~9の扇状地はこれらの郷に相当する蓋然性が高い。因みに調査地の平野部は、草壁郷に比定されている。奈良時代の主要な遺跡としては、調査地北方に国史跡の下道氏墓所があり、元禄年間に「和銅元年」の銘が刻字された吉備真備祖母の銅製骨蔵器が発見されている。一方、西方の浅海地区・毎戸遺跡は、掘立柱建物3棟や陶硯、瓦などがみられ、「馬」線刻土器が出土したことなどから山陽道の「駅家」の可能性が説かれている。また、社寺関係では、平城宮式瓦を出土した東三成廃寺(伝吉備公館址)があり、やや時期は下るであろうが式内社として鵜江神社が知られている。これらの遺跡は、いずれも古代山陽道沿いに立地する点で共通し、小田川の北岸に偏っている。それに対し、南岸はこの時期の明確な遺跡はかつて知られておらず、対照的な様相を呈している。ただ、時期的には不明確ながら、条里制の地割りが南岸にもみられ、調査地一帯にもその区割りが認められる。

平安時代にいたると、この一帯は草壁荘として発展する。そして、中世以降には、荘園の東端に大規模な山城跡が出現する。庄氏一族の主城である猿掛城は、備中南部最大の規模を誇り、中世史上重要な役割を果たした。中でも戦国時代の猿掛合戦は、安芸・毛利氏の備中進出のきっかけとなった。なお、城の裾部にあたる横谷地区には、備前長船等からの刀工招来の記録もあり、庄氏館址として一辺約50mの方形土塁も残っている。

以上のように、矢掛町一帯は、近世宿場町としてのみでなく、古代以来各時代にわたって歴 史上重要な役割を担った地域であるといえる。

註

- 1) 高畑知功「奥迫遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告60」岡山県教育委員会 1985年
- 2) 字垣匡雅「吉野遺跡」「岡山県埋蔵文化財報告22」岡山県教育委員会 1992年
- 3) 井上 弘ほか「蓮池尻遺跡」 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告79』 岡山県教育委員会1992年
- 4) 間壁忠彦「岡山県矢掛町白江遺跡」「倉敷考古館研究集報」第1号1966年
- 5) 間壁忠彦・間壁葭子「岡山県矢掛町芋岡山遺跡発掘調査報告」『倉敷考古館研究集報』第3号 1967年
- 6) 池邊 彌『和名類聚抄郷名考證』1966年・『小田郡誌』上巻1941年・『矢掛町史』本編1982年ほか
- 7) 下澤公明・大谷 猛「毎戸遺跡の調査」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 5」 岡山県教育委員会 1974年
- 8) 式内社研究会『式内社調査報告』第22巻 1980年

参考文献

- 1 「地域研究第18集 宿場町の歴史と現在(失掛町)」 岡山大学教育学部社会科教室内地域研究会 1973年
- 2 【矢掛町史】本編·史料編 矢掛町史編纂委員会 1982年

第2章 調査の経緯

小田郡矢掛町中地区一帯において県営圃場整備事業が計画されたことに伴い、平成2年7月31日付けで井笠地方振興局長より文化財保護法第57条の3にもとづく協議文書が岡山県教育委員会に提出された。関係者による協議の結果、当該地区の一部が周知の遺跡すなわち白江遺跡の範囲にかかるため、工事着工に先立って確認調査を実施することとなった。この協議もとづき、岡山県教育委員会は、工事施行前に遺跡の規模・状況等を明らかにし、遺跡保存の協議資料を得るため、平成3年度国庫補助を受けて発掘調査を実施するにいたった。 発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センターが、専門委員の指導・助言を得て平成3年10月21日から平成3年12月6日まで実施した。調査にあたっては、矢掛町、矢掛町教育委員会、

21日から平成3年12月6日まで実施した。調査にあたっては、矢掛町、矢掛町教育委員会、 地権者等関係者から多大なご協力を得た。また、発掘作業にあたっては、地元有志の方々に ご協力を得た。記して深く謝意を表する次第である。

調查体制

岡山県古代吉備文化財センター

所 長

横山 常實

次 長

河本 清

· 調査第一課長

葛原 克人

総務課長

藤本 信康

文化財保護主任

桑田 俊明 (調査担当)

発掘作業員

岡野 彰・奥野 誠・笠原芳和・笹井佳苗・田口郁男・三宅敏夫

岡野カヨ・大森幸枝・笠原サチコ・笠原知子・田口正子・横畑恒子・守谷富美子

日誌抄

10月21日(月) 器材搬入 T1・3 掘り下げ, 写真撮影

> 22日(火) T 4~6 掘り下げ,写真撮影 西区レベル仮杭設定

23日(水) T 7 ~ 9 掘り下げ, 写真撮影 T 1 断面実測

24日休)T10・11・14掘り下げ,写真 撮影 T3・9~11断面実測

- 10月25日金 T 2・12・13掘り下げ,写真 撮影T 4・7・8断面実測
 - 28日(用) T 15・16・18掘り下げ,写真 撮影T 2・13断面実測
 - 29日(火) T 17・20掘り下げ, 写真撮影 T 5・6・12・14断面実測
 - 30日(水) T 19・21・22掘り下げ, 写真 撮影中区レベル仮杭設定
- 11月1日金 T22・23・24掘り下げ,写真 撮影T15・16断面実測
 - 2 日仕) T 25・32・33掘り下げ, 写真 撮影T 17断面実測
 - 5日火 T32・34・35掘り下げ,写真 撮影T18・19断面実測
 - 11日(用) T36~38掘り下げ,写真撮影 T20・21断面実測
 - 12日(火) T 42・43掘り下げ, 写真撮影 T 22・23断面実測
 - 13日(水) T42~44掘り下げ, 写真撮影
 - 14日休)T39~41・44・46掘り下げ, 写真撮影 東区レベル仮杭設 定
 - 15日金 T40・41・44掘り下げ,写真 撮影T37~39断面実測 T15 ~20埋め戻し
 - 16日仕)T 26・2 掘り下げ,写真撮影 T 40断面実測
 - 20日休)T 28~31掘り下げ,写真撮影 T 24・25断面実測

全トレンチ排水

- 21日休)T 42~46遺構検出,清掃 専 門委員の現地視察
- 22日金 T 21~25埋め戻し T 26~29 断面実測
- 25日(用) T 26~28埋め戻し T 42~46 清掃 文化庁河原主任調査官 の現地視察
- 26日(火) T30~32·34~36断面実測
- 27日(水) T 32掘り下げ, 遺構検出, 写 真撮影 T 29~31・34~36埋 め戻し
- 28日休) T37~41断面実測
- 29日金 T 37~41埋め戻し T 42平板 実測
- 12月2日(月) T43・45平板実測 T42断面 実測 T43・45遺構一部掘り 下げ、写真撮影
 - 3 日火) T 42・43埋め戻し T 43・45 断面実測 T 32平板実測
 - 4日(水) T46断面・平板実測,遺構一 部掘り下げ T45埋め戻し T44~46排水
 - 5日休 T44断面・平板実測, T32・ 44・46埋め戻し 器材かたづ け
 - 6日金) T44埋め戻し トレンチの安 全点検器材撤収

第3章 発掘調査の概要

今回の発掘調査は、圃場整備計画にかかる地区のうち、南側の東西800m、南北500mの範囲を対象に実施した。調査の便宜上、東西の池(長池・江本池)を境にして西から西区、中区、東区と区分し、2×5mのトレンチを計46本掘開した。調査にあたっては、工事計画との関係から西区から調査にはいり、山際を中心に順次中区、東区と東へ向かって調査を進めた。各区の調査結果は以下のとおりである。

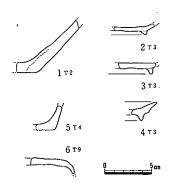
(1) 西区 (T1~14/第3·6~8図)

西区は、長池とその西側の道々川に挟まれた調査区である。14本のトレンチを設定した。 ① $T1\sim6$ (第3 · 6 図)

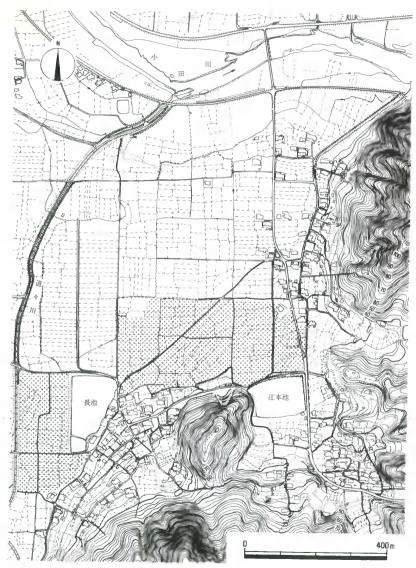
T1では、砂層が堆積し、その下層に黄白色粘土の基盤層が認められた。基盤層については、調査中には長池の底土を田地のかさ上げに使用したものかと考えたが、調査区外へも広範囲に厚く分布することなどから基盤とみる方が妥当である。また、トレンチ内では東西方向に溝状の落ち込みが確認された。この落ち込みはT2・7でも認められたが、堆積状況等からみて、人為的な掘削でないことは明らかである。トレンチ内の遺物は皆無である。T2は、荒い砂層が分厚く堆積して、弥生土器(1)のほか小片がわずかに出土している。T3でも、同じく砂層が50cm以上みられたが、基盤層は確認できなかった。遺物は、3層から早島式土器(2・3)、高台付きの小皿(4)、その下層から弥生土器が若干出土した。T4では、3層より弥生土器底部(4)が出土した。T5・6は、山際に設定したトレンチである。T5の5・7層は水田層の可能性があるが、時期不明である。

② T 7~14 (第3·7·8図)

T7はT1と同様の堆積状況で、基盤層上面は起伏に富む。T9では基盤の6層より弥生土器片が出土した。6は須恵器杯蓋の小片である。T10・14では、黄白色の基盤層が耕作土下35cmで確認された。汚れの少ない締まった土質であるが、若干炭を含んでいる。遺物は出土しなかった。T11は、昭和30年代の道々川改修までは川筋にあたり、円礫、粘土層、砂層などが混在する。T12・13の基盤層の傾斜からみると、旧道々川はT11~13で東へ蛇行している。



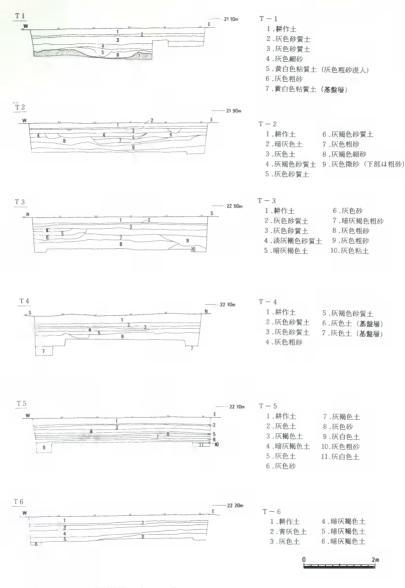
第3図 西区出土遺物 (T2~4・9) (1/4)



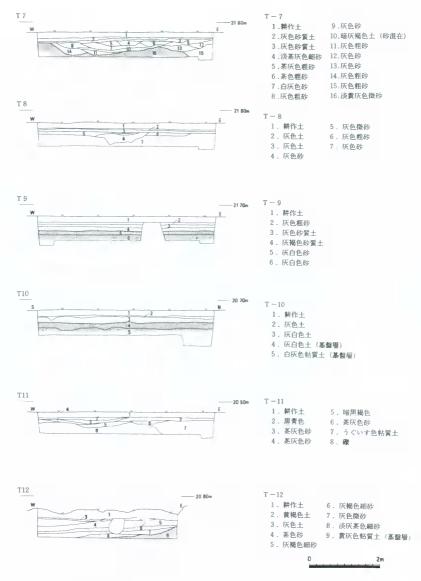
第4図 遺跡周辺地形図および確認調査対象範囲(アミ目部分) (1/8,000)



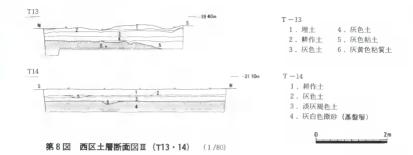
第5図 トレンチ位置図 (1/5,000)



第6図 西区土層断面図 I (T1~6) (1/80)



第7図 西区土層断面図 I (T7~12) (1/80)



以上のように、西区では遺跡は認められなかった。層序は、各トレンチにほぼ共通して、耕土下に灰色砂質土層、砂層、基盤層を基本とし、基盤層はT9より弥生時代以降に形成されたことがわかった。また、出土遺物は、T7・9以南に偏るが、いずれもごく少量である。(2)中区(T15~36/第9~13・18図)

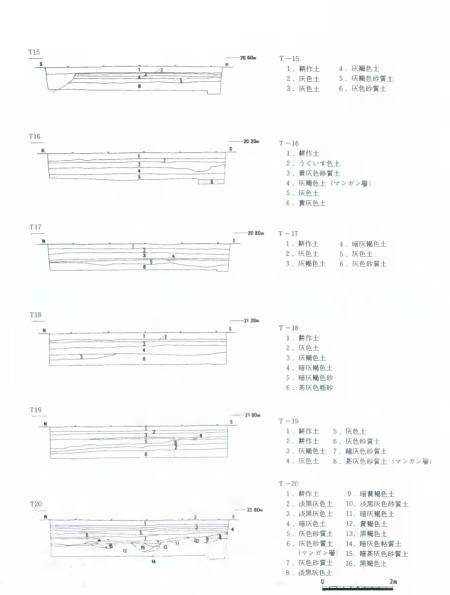
中区は、長池と江本池に挟まれた調査区で、芋岡山の真北に位置する。山添いの段丘面を中 心にトレンチを設定した。

① T 15~20 (第9·13図)

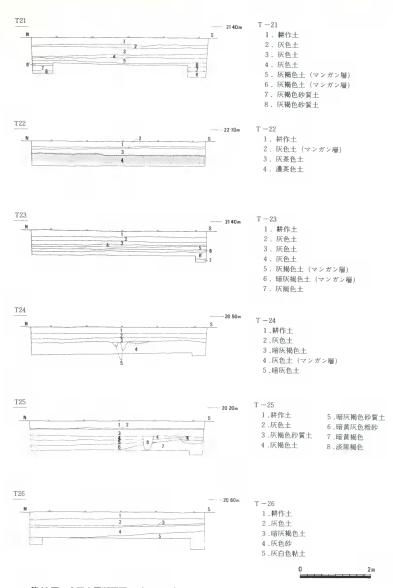
T15~17は、西区の基本層序とほぼ同様である。出土遺物には、明瞭な凹線文をもつ弥生土器の甕形土器(8)や結晶片岩製の石庖丁(56)がある。段丘先端のT18・19では、砂質土が数層にわたって堆積し、弥生土器の高杯形土器脚部(9)や中世の灯明皿(10)が出土した。T20は、高位置で白江遺跡に近く、遺構の存在が予想された。しかし、人為的な埋土の砂質土が分厚く堆積しており、2、3の落ち込みは認められるものも明瞭な遺構は確認されなかった。トレンチ南側で急な段差をもって調査区外のの緩斜面に続くようである。遺物には各時代のものがあり、特に9~11層からは緑釉陶器片が出土した。ただ、攪乱を受けており、同一層からは弥生土器ほかもみられる。12・13は、壺形土器の口縁部で明瞭な凹線文をもち、12には刻目を施す。14は、高杯形土器脚部で櫛状具によるラフな沈線文を有す。11は中期の高杯形土器杯部で内面へラ磨きである。その他、4層以下で早島式土器(16~18)が出土した。

② T 21~31 (第10·11·13図)

T21は、土層中位で非常にかたく締まった灰褐色土のマンガン層があり、その下は砂質土となっている。この層序は中区東半では共通したパターンとして現れ、特にT21以北のT23~29では顕著である。**T22**では、表土下約40cmで濃茶色のかたく締まった土層があり地山かと思われたが、土器片や焼土を含み堆積層で、遺構は検出されなかった。**T23**からは、最下層より中



第9図 中区土層断面図 I (T15~20) (1/80)



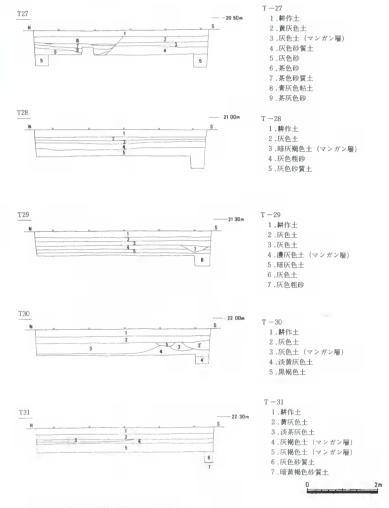
第10図 中区土層断面図 I (T21~26) (1/80)

期の弥生土器(19)が出土した。口縁部に4本の凹線文に棒状浮文を付し、内面に櫛描斜行格子文と刺突文を施す。同一層からは早島式土器(20)が共伴している。T24・25からは、各々上層から後期の弥生土器(21・22)が出土した。T21~29までは遺構は確認されず、遺物もごく少数である。T30・31は、基本的には先のT23~29と共通する土層であるが、T31では表土下約1mで基盤層に達する。出土遺物はほとんどない。

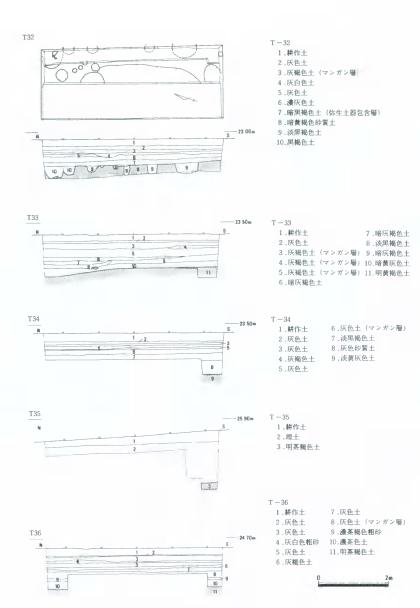
② T 32~36 (第11~13図)

前述のようにT-31以西では遺構は確認されず、出土遺物もごく少量であった。それに対し、 T32からはピットおよび土壙が多数検出され、遺跡の所在が明らかとなった。このトレンチで は、表土下50~60cmで黒褐色の包含層が緩やかに斜面堆積しており、他のトレンチと様相を異 にしていた。その直下には暗黄褐色の基盤層が北へ緩斜しながらつづき、それを切って大小8 つのピットが断面で観察された。ほとんどのピットは、深さ20~30㎝と良く遺存し、黒褐色土 が流入していた。北東隅のものは根石をもち、平石や拳大の礫がみられる。プランで確認した ものをあわせると、狭い範囲にもかかわらずピット数は12にのぼり、かなり集中した遺構密度 を示している。土壙は、径3m以上であるが深さ等は不明である。出土遺物では、南東隅付近 のピット上面より後期の弥生土器が3ないし4個体分出土した(23~25)。23は、高杯形土器の 脚部で、外面を丁寧にヘラ磨きし7条1単位の櫛状具による繊細な沈線文を施す。2段の円孔 を穿ち、丹塗りの痕跡をとどめる。壺形土器24・25の凹線文は整然としており、頸部には正月 板状具による軽いタッチの刺突文がある。内面は横方向のヘラ削りである。**T33**は、T32の真 南約30mに設定したトレンチである。土層中位にかたいマンガン層があり、表土下約120cmで 基盤層に達する。基盤層上面は南半ではほぼ水平であるが、北半は緩やかに北に下降する。さ らに、北壁の様子では東へ向かっても少し地形が下がるようである。東壁断面では明瞭な遺構 は検出されなかったが、南壁で9層以下でピットを確認した。径30cm以上、深さ35cmで暗灰褐 色土が流入していた。T32に比し遺構が極端に少ないが、遺物は各時代のものが出土している。 特に、上層とはいえ前期弥生土器(26)の出土は、この遺跡の上限を示すものとなった。壺形土 器で外面を丁寧にヘラ磨きしている。29は、後期の壺形土器で胴部最上部までヘラ削りがおよ ぶ。27は、丹塗りの甕形土器である。28は、高杯形土器の脚部で全面横ナデである。30・31は、 中世土器の小片である。これらはいずれも2~3層の出土であり、遺構検出面での良好な資料 はない。

T34では、遺構は確認されず、出土遺物も早島式土器(32)ほかごくわずかであった。ただ、表土下120cmには基盤層が確認され、その上部7層は淡黒褐色土で先のT32の7層にやや近い土層である。**T35**は、周辺のトレンチより2m余り高所にあり当初遺跡の可能性が高いと予想された。しかし、地権者の古老によると、この一帯の畑地は昭和初期に江本池の底上げ土を相

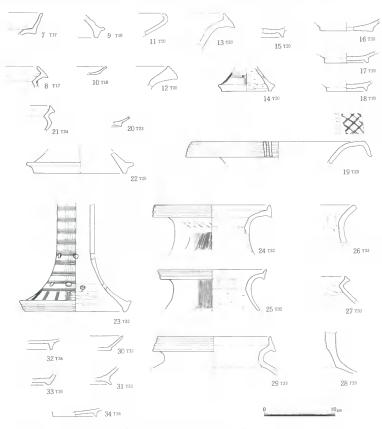


第11 図 中区土層断面図皿 (T27~31·33) (1/80)

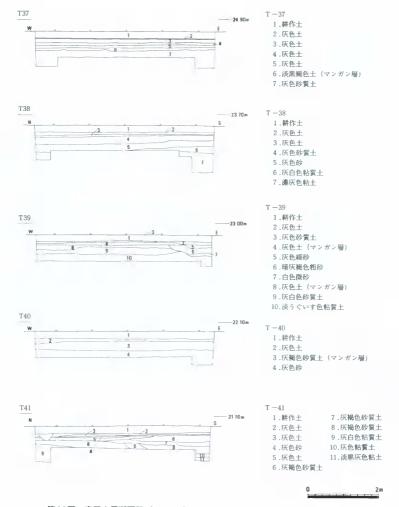


第12 図 中区土層断面図IV (T32・33~36) (1/80)

当大規模に埋め立て造成したそうである。実際規関してみると、150cm余りの埋土が堆積しその直下に明茶褐色土層が認められた。この3層は炭や焼土塊を少量含み、T22の4層と同一である。なお、このトレンチでは埋土が非常に厚いため、南東隅を1m四方で約180cmまで掘下げるにとどめざるを得なかった。 **T36**は、T31の層序とよく似ているが、表土下110余cmでT35の明茶褐色土(3層)に達した。T35・36間のこの土層上面の高低差は約80cmである。遺物は、



第13 図 中区出土遺物 (T17・18・20・23~25・32~36) (1/4)



第14 図 東区土層断面図 (T37~41) (1/80)

T35の埋土から須恵器の杯(33)、T36からは早島式土器(34)が出土した。

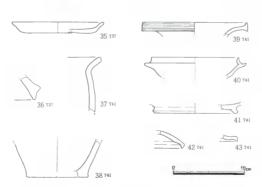
以上のように、中区では東南部において遺跡が確認された。遺跡の範囲は、調査のかぎりではT32・33を中心に比較的限定されるようである。この部分は、本来江本池からの扇状地の先端部分にあたり、北に小さく突き出した舌状丘陵をなしていた。遺跡はこの低丘陵上に立地するものであり、弥生時代後期を中心に前後の時期にわたって存続している。

(3)東区(T37~46/第14~24図)

東区は、江本池の北側に位置し、地形的には東方山塊から派生した小丘陵の先端裾部にあたる。この点は、南方山麓に属す西・中区とは地形的に様相を異にする。当初の工事計画に添って旧県道以西に10本のトレンチを設定した。

① T 37~41 (第14·15図)

T37~41は、低位段丘の西側下端部に設けたトレンチである。基本層序は、T37・41で把握できる。すなわち、耕作土下に茶灰色砂層、茶灰色砂質土層(硬質マンガン層)、灰色粘質土、濃灰色粘土層と続く。基盤層はいずれからも確認されなかった。また、耕作土直下には近世前後の水田層が認められた。T37は、酸化の著しい土層で、特に7層の土質変化は激しい。遺構はみられず、遺物も上層からわずかに出土したにすぎない。35は土師質土器、36は弥生土器の高杯脚部であるが、いずれも摩滅した小片である。T41では、上層から弥生土器と須恵器が出土している。すべて流入遺物である。弥生土器では前期の甕形土器(37・38)がある。37は全面摩滅のため詳細は不明だが、口縁部に刻目をもち、胴部最上部に2本の沈線を施す。38も同じく風化が著しく調整等は不明である。また、39は中期後半の壺形土器で口縁部の凹線文は



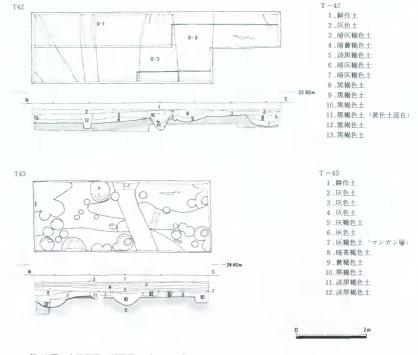
第15図 東区出土遺物 I (T37・41) (1/4)

シャープで整然としている。 須恵器では、杯身(40・ 41)と杯蓋(42・43)があ る。6世紀末から8世紀の ものである。

② T 42 · 43 (第16 · 17 · 26図)

これらは低位段丘の北端に設けたトレンチで、すでに調査当初より周辺の畑地から弥生土器 や須恵器が多数表採されていた。

T42では、溝が5条確認された。いずれも東西方向に掘削され、黒褐色土が流入していた。 D1は幅は狭いが断面箱形のしっかりした溝である。遺物はない。D2は中期後半の弥生土器 を伴出し断面U字形を呈す。D3はD2と切り合い、上面より後期の弥生土器 (48・49・53・ 54) が出土した。竪穴住居跡の可能性もあったため、南に拡張して調査を進め、溝であること を確認した。また、拡張区の南端では中期後半の弥生土器 (44~47) がまとまって出土してい る。54は、外面を荒い刷毛目で調整し、内面はヘラ削りが胴部上半までおよぶ。口縁部は上方



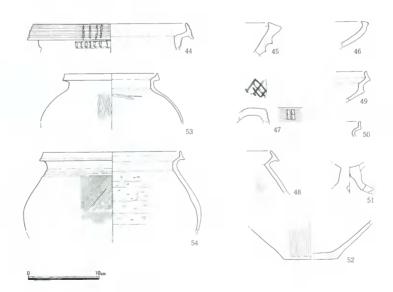
第16図 東区平面・断面図 I (T42・43) (1/80)

に内傾して拡張するが、凹線文はもたない。45・53は、壺形土器の破片であるが、53は口縁部 上端が小さく立ち上がり、肩部の張りが大きい。外面は縦方向の刷毛目を残す。52の外面はへ ラ磨きである。47は口縁部が下方に大きく垂下する壺形土器で、明瞭な凹線文に棒状浮文を付 し、内面に斜行格子文を施す。甕形土器44・48は、ともに口縁部を上下に拡張し明瞭な凹線文 を4本施す。44は加飾性に富み、浮文や突帯文を有す。48の胴部内面は刷毛目調整である。46 は、高杯杯部で口縁外面端部に刻目がある。その他に磨製の蛤刃石斧(55)などが出土したが、 土器では弥生土器以外はみられなかった。

T43では、ピットおよび溝が密集して検出された。溝は南北方向に2条、それらを切って東西に直交する溝を1条確認した。幅55cm前後で、深さは30cm程度である。出土土器には、弥生土器(104~106)や須恵器の高台付き杯身(107・108)等がある。

④ T 44 (第18~24図)

このトレンチは、今回の調査区の東端に位置する。掘開の結果、南北方向の大溝を確認し、 陶硯をはじめ多数の遺物が出土した。特に円面硯の出土により、大溝や遺跡全体の性格をより 正確に把握することが必要となり、溝については完掘することにした。

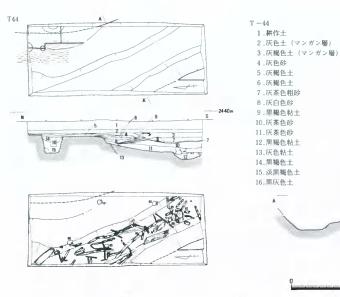


第17図 東区出土遺物 I (T42) (1/4)

大溝は、トレンチとほは平行して検出されたため規模・土層などに不確定な点が残るが、規模については、上幅約250cm、底部幅70cm、深さ70cmを測り、溝底はわずかに北へ下降する。溝の方向はN-24°-Wで、磁北よりやや西に傾いている。もっとも、トレンチ中央でわずかに湾曲して東に方位を振る傾向がうかがえる。溝の西壁がやや急斜なのに対し東壁は緩傾斜であることをあわせると、自然河川の様相も看取できよう。溝



第18図 西・東区出土遺物 (T16・42・44) (1/4)

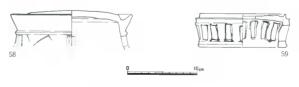


第19図 東区平面・断面図 I (T44) (1/80)

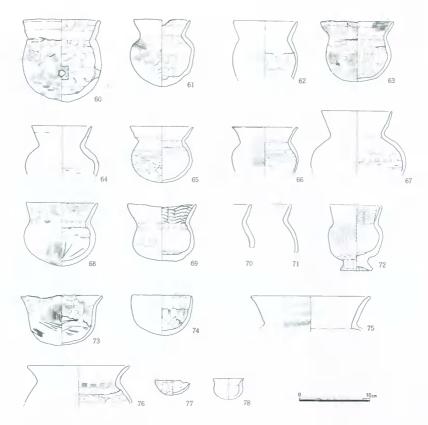
内の土層は、断面をみるかぎり複雑な堆積をなすが、大きくは3層に分けられる。上層は、暗 灰褐色土層でさらにマンガンの沈着度合いにより分層可能である。中層は粗い砂層で土器を多 く含む。下層は溝底に堆積した粘土層で、多量の木材と完形の土器が出土している。木材は、 大部分が自然木であり、種類もコナラ、アラカシ、アベマキ、イムツゲ、ヤマガキ(シブガキ)、リョウブ、と多種類にわたる。ただ、こうした流木に混ざって若干加工木も含まれている。北隅から板材(アラカシ)ほかコナラの部材が数点出土した。なお、トレンチの北東隅からは大小3つのピットが検出された。これらは、大溝によって切られており、溝に先行する時期の遺構の存在が確認された。

次に、大溝出土の遺物について述べることにする。

陶硯(58・59)大溝上層から円面硯が2面出土した。溝南側の中央にまとまってみられ、出土レベルは表土下45cm、3層と4層の境に相当する。58は無堤式の圏足硯(透脚硯)で脚部下半を欠くもののほぼ完形に復元できる。巻き上げ・ミズヒキ成形で透しを有す。陸部は中央が若干凸面で平滑である。外縁の接合面にはミズヒキの痕跡がきれいに残っており、海部と脚部を作った後外縁を貼り付けている。外縁は斜め外方に大きく突き出し上端に浅い沈線を施す。裾広がりの脚部には長方形の、ヘラ切りによる透しが付く。焼成は通常の須恵器と変わらず灰色を呈し、胎土中にも2~5mm大の石粒を含む。陸径13.2cm、現高5.0cmである。59も無堤式の圏足硯であり、全体の4分の1を残し遺存良好である。巻き上げ・ミズヒキ成形で、脚部と陸部接合時に外縁を作っている。外縁は小さく上方へつまみ上げる。海部はきわめて浅く、陸部との境の稜線は不明瞭である。陸部は非常に平滑でよく使用されている。脚部はやや短めで、上下を突帯と沈線で画しその間にヘラ切りの長方形透しを配する。透しはやや粗雑である。焼成は良好で青灰色を呈し胎土中の石粒も少ない。陸径9.8cm、現高4.8cmとやや小ぶりである。須恵器(98~100)上層から数点出土した。陶硯とほぼ同一層である。98・99は杯の蓋である。前者は退化した扁平な宝珠形つまみのつくものである。どちらも磨耗が著しい。100は少し外方にふんばる高台のつく杯である。いずれも8世紀代のものである。



第20図 東区出土遺物Ⅲ (T44) (1/4)

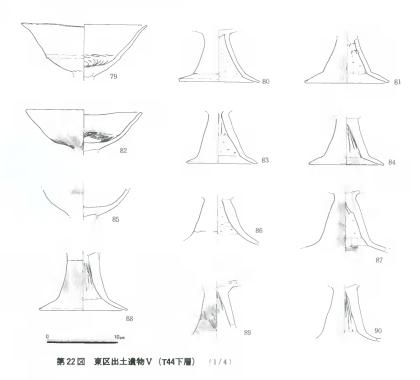


第21 図 東区出土遺物IV (T44下層) (1/4)

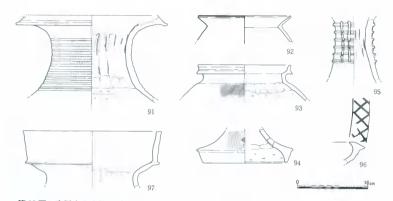
土師器 (60~90・92・97・101~103) 101~103は上層出土の皿で、101と103は精選した胎土で 丹を施す。

60~74は、最下層出土の小形壺形土器で、遺存がよくほとんどが完形で出土した。個体数は全部で15点余りあり、その約半分が完存品である。これらは、形態・調整により幾つかのタイプに分けられる。形態的には、口縁部がわずかに内湾気味に逆ハの字形に開き、胴部との比率は1:3のものが大多数である。大きさは、器高8~9cmのものが大部分であるが、少し大きめのもの(60・67)がある。口径に比し胴部最大径が小さいもの(63・65・69)と大きいかも

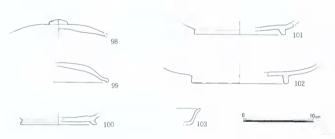
しくは同等のもの(60~62・64・66~68ほか)がある。前者は胴部の張りが弱くなで肩で、やや長胴である。それに対し、後者は肩部に張りがあり球形に近い胴部である。調整では、胴部内面をナデ調整するもの(60~62・65・68~1)とへラ削りするもの(63・64・66・67)がある。胴部外面は、縦方向の刷毛目調整が多いが、ヘラ削りするもの(65)や指ナデ調整のみのもの(69)もある。60には胴部中央に焼成後の穿孔がみられ、61・66・67・69には外面に煤が付着していた。また、69内には種子が5点入っており注目された。なお、72・73は先の壺形土器の亜種ともみられ、72は脚部を付したものである。74は碗形土器であるが、この壺形土器の亜種ともみられ、72は脚部を付したものである。74は碗形土器であるが、この壺形土器である。大きく上方に立ち上がる二重口縁で、端部を小さく肥厚させ上面に幅広な凹線文を1本施す。内外面に丹塗りの痕跡を残す。



- 57 -



第23図 東区出土遺物VI (T44中層) (1/4)



第24 図 東区出土遺物VII (T44上層) (1/4)

高杯形土器 (79~90) は、先の壺形土器と伴に溝底付近を中心に出土した。総数は15点は下らない。79は杯部で、底部内面にヘラ状具による渦巻状の暗文をもつ。82にも暗文風の痕跡がみられる。脚部は、大きくは2タイプあり、脚柱部が上方にすぼまるものと、そうでないもの(88) がある。裾部は屈曲するが総じて短く、円孔はみられない。。外面は刷毛目もしくは横ナデ調整であるが、内面はヘラ削りするもの(80・81・83・86・87)とナデ調整のみのものとがある。先の小形壺形土器とともに出土した類例としては、岡山市・川入遺跡法万寺調査区大溝町層出土土器などがある。

弥生土器 (91・93~96) 94を除いて溝中層の砂層から各種の土器が出土している。95は中期前 半の高杯脚部で、脚柱部に貼付突帯と棒状浮文をもつ。 96は高杯の杯部で、口縁部の両端部を内外に拡張し、上面に斜行格子文を施す。外面には太い 凹線文が2本ある。甕形土器93は口縁部に凹線文を1本もつ。91・93は後期の壺形土器で、口 縁部の凹線文は退化している。内面へラ削りは胴部上半まで及ぶ。94は高杯脚部で内面へラ削 り外面へラ磨きである

手捏土器 (77・78) 78は先の小形壺形土器のミニチュア製品である。溝底からの出土である。 両方とも外面に比べ内面をやや丁寧に仕上げている。

砥石 (57) 中層最下部から出土した。中央がやや窪む六角柱で各面とも縦方向によく使用している。材質は砂岩である。

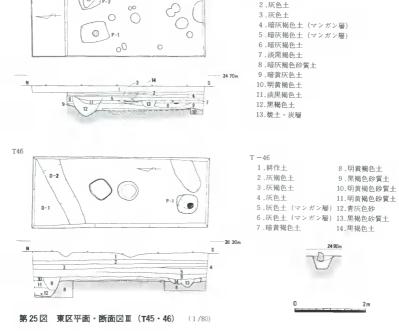
⑤ T 45·46 (第25·26図)

T45

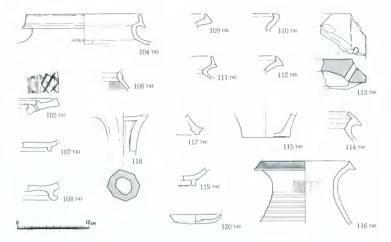
T44の陶硯の出土により官衙遺跡の可能性が出てきたため、これらのトレンチはほぼ磁北に添って設定した。

T45では、長方形プランの柱穴($P-1\cdot 2$)を検出した。間隔が短すぎるとはいえ、両ピットはほぼ東西方向に並んでいた。しかしP-2には弥生土器($109\cdot 110\cdot 112$)が流入しており、中期中葉のピットであった。P-1も同時期の可能性があるが、暗黄褐色の柱痕がき

T-45 1.耕作土



- 59 -



第26 図 東区出土遺物で (T43・45・46) (1/4)

れいに残っていた。そのほかに円形のピットをいくつか確認した。出土遺物では、丸瓦 (113)がある。領恵質で玉縁をもち、内面には布目をとどめる。釘孔もみられる。その他では弥生土器が若干出土している。このトレンチは次のT-46とともに湧水が著しかった。

T46は、遺跡の最高所に位置し、溝 3 条と柱穴(P-1)、浅いビット 2 を検出した。 P-1 は、南西隅にあり、隅丸方形で柱痕が非常によく残っていた。現存最大径19cm、長34cm で材質はケヤキである。 1 本の丸太を 4 分割し、心材部分は面取り、辺材部分は樹皮を剝いで利用している。当初、T450 P-1・ 2 とともに奈良時代以降の柱穴かと期待されたが、柱穴内より外面へラ磨きの弥生土器が出土した。北端には、 2 条の溝(D-1・ 2)が検出された。 D-1 は、深さ55cmの溝底付近から弥生土器が出土し、幅は140cm以上ある。 D-2 は、D-1 埋没後に開かれたものである。

出土遺物には、八面取りの高杯脚部(118)がある。摩滅のため詳細不明であるが、丹塗り 土器である。そのほか、弥生土器(中期・後期)、中世土器などが若干ある。

表-1 トレンチ調査概要一覧表

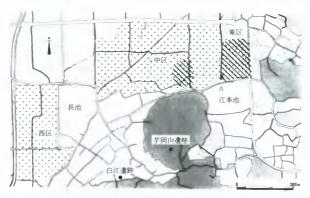
レンチ 号	検出遺構	出土遺物	出土量	現 表土レベル (m)	遺構・遺物包含 までの深さ(ca
				20.85	
1	_	16.4. 1.88	催少	21.55	
2	Also .	- 外生土器	1		
3	_	弥生土器・中世土器	少量	22.20	_
4	-	- 弥生土器	僅少	21.85	
5	-	須恵器・土飾器	僅少	21.80	_
6	-	須更器	僅少	21.95	_
	-	弥生主器	僅少	21.30	
8	-		-	21.25	_
9	-	須恵器・土師器	僅少	21.35	-
10	-	-	-	20.45	-
11	_	中世土器	僅少	20.20	-
12	-	_	-	20.40	_
13	_	_	-	19.10	-
14	-		-	20.75	-
15	-	須密器・土師器	僅少	20,35	_
16	_	須恵器・土師器・石庖丁	僅少	20.00	1-
17	-	弥生土器・須恵器・土師器・中世土器	僅少	20.30	-
18	_	弥生土器・須密器・土師器・サヌカイト制片	少量	20.85	-
19	_	弥生土器・須恵器・土師器	少量	21.50	-
20	_	弥生土器・須恵器・土師器・緑釉・亀山焼・中世土器	中量	22.30	_
21	_	土御器	僅少	21.10	_
22	_		僅少	21.75	-
23	_	弥生主器・中世土器・サヌカイト剝片	僅少	21.10	_
24	_		催少	20.20	_
25	_	弥生土器 - 土節器	僅少	19.80	_
26	_	_	-	20.25	_
27	_	_	_	20.20	_
28			_	20.65	_
29		_	-	21.00	_
30		_	-	21.70	_
31			_	22.00	_
	土壙1・柱穴	弥生主器 -	少量	22.80	-60
32		外生土器·須恵器·土師器·中近世土器	中量	23.15	-94
33	柱穴		(後少	23.25	34
34		十世監 小子工學、河京學、中臣工學	様少	25.60	_
35		工 申 音	催少	24.45	
36	-		僅少	24.45	
37	_	弥生土器 ・中世土器	便少	1	
38	-			23.40	
39	_	弥生土器·須恵器	少量	22.65	
40	_	外生土吞	進少	21.85	
41	-	弥生主器・須恵器・サヌカイト制片	少量	21.40	-
42	溝 7	弥生主器・須恵器・中世主器・蛤刃石斧・サヌカイト剝片	多量	23.30	-35
43	講3・土壙・柱穴	弥生土器・須恵器・土師器・スクレーバー	中量	24.10	-48
44	沸1・柱穴	円面観・弥生主器・須恵器・主師器・製塩土器・亀山焼・中世土器・サヌカイト	特に	24.15	-40
		片・砥石・加工木	多量		Ì
45	柱穴(方形ほか)	弥生主器・須恵器	中量	24.40	-25
46	佛3・柱穴	弥生主器・須恵器・土飾器・白磁?・中世土器	多量	26.00	-70

第4章 まとめ

このたびの確認調査は、矢掛町中地区県営圃場整備事業予定地が著名な白江遺跡の一部にか かることから、遺跡の所在および範囲確定のため実施した。

調査の結果、2箇所で遺跡を確認し、遺構・遺物等について貴重な資料を得た。とりわけ、 東区では大溝から陶硯が出土し、他の土器等よりみて8世紀後半の官衙遺跡の蓋然性が高まっ た。この点については、今回の調査は遺跡の性格を確定するにはなお十分とはいえないものの、 事後の協議においても重要と思われるので最後に少し詳しくふれたい。

東区の遺跡は、東からのびた低丘陵の先端裾部に広がり、T42~46にかけてその全域で遺構が確認された。遺跡の範囲については、調査のかぎりでは、T42~46を含む東西約100m、南北約120mが推定される。もっとも、遺跡の西限は地形およびT37~41の状況より第27図のAラインがほぼ確実であるが、南限は江本池中にやや入り込む様子であり、北・東側も少し調査区外へ広がるようである。なお、西限のAラインは条里地割り推定線と一致しており、遺跡の性格とも関連して注意を引く。この遺跡は主に弥生時代中・後期を中心とした集落跡で、時期的には前期にまで遡り、その後古墳時代、8世紀後半にわたる複合遺跡であり、中世まで継続している。遺構としては弥生時代ら後期の溝、ビットが特に北半(T42・43)を中心に検出された。南側には方形プランの柱穴が2、3確認でき、なかでもT46のP-1は柱材をよく残していた。一方、東側では円面硯を出土した大溝が検出され、奈良時代の遺構かと思わわれたが、



第27 図 遺跡範囲想定図(斜線部分) (1/10,000)



第28図 小田川周辺の古代遺跡分布図

完掘の結果、5世紀前半の溝であることが判明した。この溝は、南方谷部より北流する小河川・原川の河道筋にあたり、自然河川を利用した人工溝とみられる。溝底の各十数個にのぼる小形壺形土器と高杯形土器等の出土は、溝内祭祀の様相を示すものと推定される。一方、西区の遺跡は、T32を中心に比較的小範囲に広がり、時期的には東区と一致するようである。弥生時代後期を中心とするが前期の十器もあり、

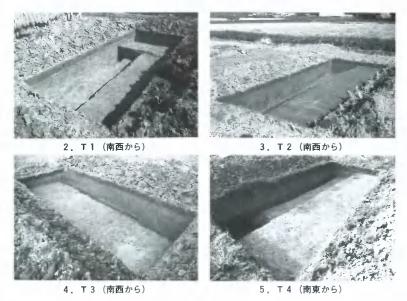
須恵器、中世土器も出土している。遺構、地形よりみて各時期の集落跡と推定される。

最後に、東区の官衙遺跡の蓋然性について述べてみたい。円面硯の出土例は県内で100点を 越すが、一般にその出土遺跡は寺院跡・官人の居館跡あるいは官衙跡である可能性が高いとさ れ、ことに8世紀代では限定される。当遺跡では、この時期の遺跡の範囲がほぼ1町四方に近 く、立地上も条里遺構とされる区割りの南東隅にきれいにおさまる。さらにこの場所は、古代 山陽道とは川ひとつ隔たるものの草壁郷内はもとより北方の東三成・矢掛・川面地区などの他 の郷まで視野にいれることができる。また、出土遺物には供膳用の丹塗り高杯や皿、時期差は あるかもしれないが丸瓦など、一般の集落ではあまりみうけられないものがある。結果的には 明確な遺構は確認できなかったが、以上の諸点から当遺跡は官衙跡とみられ、特に郡衙の可能 性が高いと考えられる。従来、郡衙には小田地区の毎戸遺跡西方の「郡宮址」一帯が候補にあ げられてきたが、考古学的根拠に乏しく、また、同地区内には突出した後期古墳もきわめて乏 しいこと、必ずしも旧山陽道や駅家の近辺に郡衙を限定する必要はないことなどから、この説 には疑問の余地がある。むしろ、第1章で述べたように古代小田郡ては8~9の勢力が自己完 結的に安定した生産基盤をもちながら分立し、しかも河川統御において結合していたとみられ る。とすれば、官衙は一局に集中するとみるより分散していたとみたほうが自然であろう。中 世以降に草壁荘として発展する当地区、あるいは北の吉備真備と縁の深い東三成地区あたりに 可能性を求めることもできよう。しかし東三成では既に徹底した確認調査がなされているが、 官衙の痕跡はない。したがって、出土遺物をはじめこうした様々な状況より、当遺跡は8世紀 後半の小田郡衙、あるいはそうでなくとも郷倉等といった官衙跡と推定される。

以上のように、今回の調査により貴重な遺跡の存在が明らかとなったが、今後の圃場整備事業の実施にあたっては、関係者間で充分な連絡、協議の徹底を希望するものである。



1. 調査地遠景(南から,手前は白江遺跡)

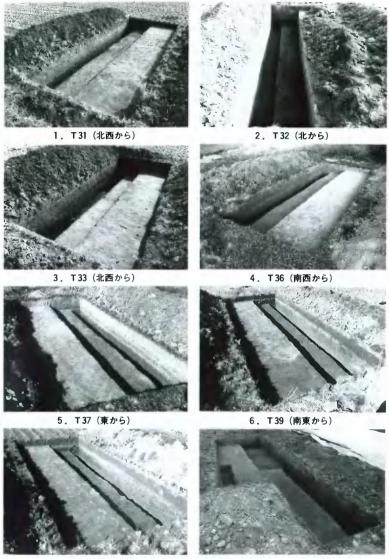




図版 4 1. T23 (北西から) 2. T24 (北から) 3. T25 (北西から) 4. T26 (北西から) 5. T27 (北西から) 6. T28 (北西から)

7. T29 (北西から)

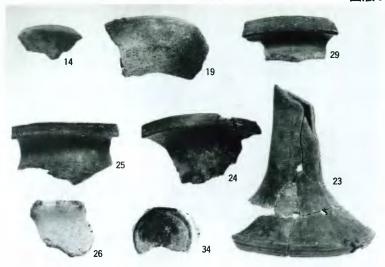
8. T30 (北西から)



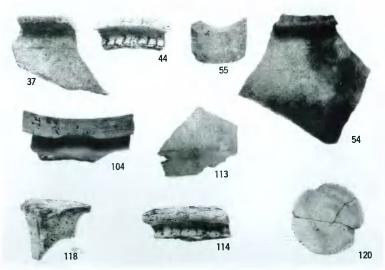
7. T40 (南から)

8. T42 (北西から)

7. T46 (北から) 8. T46 (Pit,北から)



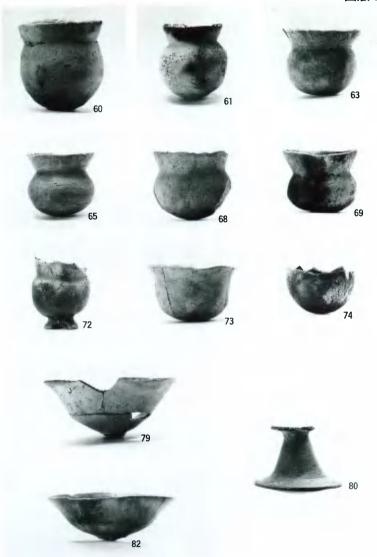
出土遺物 I (中区-T20・23・32・33・36)



出土遺物 I (東区- T42・43・45・46)



出土遺物II (東区-T44)



出土遺物Ⅳ(東区一T44)

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 80

赤浜散布地ほか白 江 遺 跡ほか

平成4年3月23日 印刷平成4年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備 文化財センター 発行 岡山県教育委員会 印刷 サンコー印刷株式会社